吉田彌平編

文國範師

第一部

四卷

42596
教科書文庫
4
810
51-1926
2000 301855

資
教科書文庫
4
810
51-1926
2000301855
375.9
Y019

文部省檢定濟
大正十五年三月十七日　師範學校國語科教科用

吉田彌平編

師範國文

第一部用

卷四

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000301855

廣島大學圖書之印

廣島大學教図書
44861

師範國文 第一部用 卷四

目次

一 ふれ〳〵粉雪……新村出 一
二 秋……千家元麿 九
三 こゝろ……北原白秋 一四
四 富士禮讃……野口米次郎 二四
五 偉人……嘉納治五郎 三〇
六 妹にさとす……吉田松陰 四二
七 擣衣……清水濱臣 四四
八 名物……五五

九　手折りし枝に吹く春風……室　鳩巣　五七
一〇　武士道……山路愛山　六三
一一　神無月の頃……兼好法師　七一
一二　人のなき跡……兼好法師　七二
一三　四時のあはれ……兼好法師　七四
一四　縁起の話……關根正直　七九
一五　物の初……幸田露伴　九一
一六　賀茂眞淵……伴　蒿蹊　九七
一七　春の心……一〇三
一八　師の説になづまず……本居宣長　一〇六
一九　淺草紙……吉村冬彦　一〇九
二〇　繪馬……饗庭篁村　一一七

二一　鵯越……〔源平盛衰記〕　一二五
二二　扇の的……〔平家物語〕　一三
二三　狐塚……〔狂言記〕　一三九
二四　駿河大納言……新井白石　一四八
二五　忠直卿行狀記……菊池寛　一五五

廣島大學圖書之印

師範國文 第一部用 卷四

新村出
國語學者
京都帝國大學教授
文學博士
明治九年靜岡縣生

讃岐の典侍
堀川院の女房

一 ふれ〳〵粉雪

新村出

中古の童謠に「ふれ〳〵粉雪」といふ一句だけ傳はつてゐるのがあります。是は今から八百年ほど前に御在位になつた鳥羽天皇が當時の童謠をお口ずさみになつたのを、御乳母の讃岐(サヌキ)の典侍(スケ)がその日記に書きのこしておいたのです。天皇はその時、六歳でいらつしやいました。御卽位になつたのは前年の十二月一日でしたが、歳も明けて翌年の正月二日の朝、御乳母が御前に出たところに、雪がこん〳〵降つてゐたをりに、御幼年の鳥羽天

皇は、あの童謠をおうたひになつて興がつておいでになりました。さすがの乳母の典侍も少し意表に感じたといふことですが、その話は讃岐典侍日記の下卷にかきとめてあります。昨年あたり澄宮様がかず〳〵の童謠をお作りになつてお示し下さつたことゝ思ひあはせて、誠にゆかしく又うれしく覺え奉ることであります。

澄宮殿下

日本の童謠の歴史でも、この上もない味はひのある逸話だと考へられます。この童謠は、それから二百五十年ばかりの後の兼

好法師時代にも、まだ京都邊では口にされたと見えまして、徒然草の百八十一段に、やはりそれの斷片を載せてあります。そこには「ふれ〳〵こゆき、たんばのこゆき。」としてあつて、「たまれ粉雪」といふのを、「丹波のこゆき」と訛つたのであると解釋してあります。「垣や木のまたに。」とある文句が、その後につくやうになつてゐますが、全體の童謠は錄してありません。どうせ短い形であることは勿論です。どこかに今でも全形が多少の轉訛はあつても遺つてゐはしないかと思はれます。俚謠集の拾遺を見ますと、京都の童謠でかういふのが載つてをります。

雪やこん〳〵、霰やこん〳〵。

お寺の松樹に、一ぱい積り、こん〳〵。

いくらか昔の文句の面影がかよつてはゐるやうです。關東で

俚謠集　文部省の文藝委員會で編纂したもの
拾遺はその後高野辰之等が續いて編纂したもの

も以前これと同じ句調か文句のが聞けたとおぼえてゐます。

私どもの小さいときには「ゆきやこほり、おべたいこほり。」とか何とか歌つたやうな氣がしますが、こんな童謠もだん〳〵影をかくしてしまひさうで、なつかしくてたまりません。

もう一つ雪の童謠を出します。やはり京都に、雪が降る日に空を仰ぎながら、兒童が、

雪ばな散るはな、空に蟲が涌くはな、
扇腰にさいて、きりゝと舞ひましよ。

とうたふさうです。俚謠集拾遺にさう錄してありますが、「空に蟲がわくはな。」とは少し面白くない文句ですが、末句のひきしまりかたもよくて、いかにも江戸時代の近世趣味がうかぶ心地がします。

大佛殿
慶長元年地震で崩れた、同七年秀頼再建中火が出て全燒

今度はうめあはせに熱の方の文句ですが、「京の〳〵大佛さんは、天日で燒あけてなあ、三十三間堂が燒あけ殘つたアリヤドンドンドン、コリヤドン〳〵〳〵。」といふ文句を京都の街の兒がうたふのを聞きます。大變調子のよい謠です。私たちのやうな歷史ずきには、慶長七年十二月の大佛殿炎上のことが想ひ出されて、豐國祭だの、大佛殿再建だのと、それからそれへと追懷させられます。また時候のよい頃の夕がたに、街の片わきや軒下などで、一群の子供が寄り集つて、その中でひとり鬼が眼をかくして背を向けてゐると、輪をなした群では、立ち場所をいろ〳〵變へながら、「でんこ〳〵」と呼びかける鬼に對して、「だれの次にはだれが居る。」と節をつけていふ。鬼が當てそこなふと、「どつこいすべつて橋の下。」と合唱するのが、東京から移住した私たちには非常

に珍しく感じられて、しば〳〵立留つては耳をかたむけたものです。十數年來何だか廢れ氣味になつたと思はれます。

これは童謠とはいへませんが、殘しておきたい遊だと考へます。「兒を取ろことろ。」の遊にしろ、「こゝはどこの細道ぢや。」の文句にしろ、幼時自分たちが東京で遊んだり又聞いたりしたものであると、一層いひ知れぬなつかしさに絆されます。女の兒たちが、「天神樣の細みちぢや。」「ちいつと通して下さんせ。」などといふ掛けあひの文句は、いまだに耳について、思浮べるとしみ〴〵昔がこひしくなります。

夕がた、夏にしろ、秋にしろ、澄みわたつた大空に星をやつと一つ見つけ出して、「一つぼし見いつけた。」とうたふ文句も詩的ないひぐさです。こんなのも今都會で聞けるでせうか。二十年ばかり前でしたが、駿河の海岸をある夏の黃昏時に七つ八つぐらゐの男の兒の手をひいて散歩してゐたとき、その兒の卽興か或はまた村の俚謠のはしくれか知れませんが、「一つ星が落ちたら、みんな星がお、ちてしいまふ。」といふ樣な文句を、ちよつとした節をつけてその兒が口吟んだのを思出します。その時分、何かの雜誌にその文句を錄して寄せたのですが、今は思出せません。哲人か大詩人かの零語にでも出て來さうで、無上にうれしかつたことを記憶してゐます。ほんとに宇宙の眞諦をいひあらはしたやうな氣がしました。

この六月、或雜誌で入選した小兒の童謠に、

工場のけむりは
くろいけむり。

高き屋に
高き屋に登りて
見れば煙立つ民
のかまどは賑ひ
にけり
（藤原時平）

お湯のけむりは
しろいけむり。
どこまでゆくの。
いつしよにお行き。

といふのがありました。いかにも現代的都會たる大阪の氣分を漂はせた上乘の作品だと思ひました。單純な構想で、技巧もごく大まかで、しかも幽幻な情趣が味はれます。全く都會現代的であつて、見る人の方の考を以て解すると、勞働者の生活をも思浮べられさうですし、最後の一句の如きも、子供らしい親しみをあらはすと共に、社會的の協調を暗示するやうな含蓄に富んだ佳作と信じます。また古典趣味の私たちには、土地が浪華だけに「高き屋に」の古歌をも想ひ起させずにはおきません。現代的な詩では、ヴェルハーレンの「都會」の詩の或一二句を偲ばせます。それからブラングウィンのエッチングにも私の想像は馳せてゆきます。これの聯想は私だけの勝手な感じであつて、作そのものゝ評價としては過ぎてゐませうし、買ひかぶりでも力負けでもありませうが、少なくとも兒童の童謠としては、自然であつて、技巧を超越した點に於て特筆する價値はあらうと信じます。（南蠻更紗）

ヴェルハーレン Verhaeren 白耳義の詩人
ブラングィン Brangwin 英國の畫家
エッチング Etching 腐蝕版

千家元麿
詩人
明治二十一年東京生

二秋

初秋

秋だ。

千家元麿

川には水の色澤も勢もなくなつて、
いつも寂しく澄んでゐる。
溫かい日の光がさしこんで、
水底が明るくよく見える。
その妙に明るいところに
鯊が砂に腹をくつつけて目を開いてゐる。
私たちはその靜かな魚の鼻の先へ絲をうまく下すと、
鯊はすぐ前へ動いて餌に食ひつく。
石垣傳ひに私たちはこの川べりで半日くらす。
もう海の方へ往つて見る氣もしない。
むしろ靜かなこの川べりの方が氣が樂々する。
餌につく魚の動作が見えるのが面白い。

北原白秋
名は隆吉
詩人
歌人
明治十八年福岡
縣柳河町生

餌をおろすと體の方向を轉換して餌に尻を向ける奴もある。
いくらしつつこく遣つてもそつぽを向いて逃げて了ふ。
すぐ飛びついてくる奴は氣持がよかつた。
妙に潑剌としてゐる奴だつた。
友も夢中になつて釣つてゐた。
二人ともへんに淋しかつた。
凡てのものが澄んで明るかつたが、
晝間でものの悲しかつた、夜のやうに。（炎天）

新月

斷崖の松の木に

北原白秋

月ほそく懸りたり、
ほそき月、
金無垢の月。

入海の波間にも
また月はしづきゆく、
沈々と、
金の鈎。

金無垢のするどさよ、
絹濾の雨ののち。
しんじつに

走りいづるその蒼さ。

島黑く、海黑き
眞の闇、
舟ひとつ進みゆく、
そのうへにほそき月、

なにかわかね、
魚族は目をさまし
鈴蟲は一心に鳴きしきる。
虔の極り。

闇の夜の斷崖も、松の木も、
かげわかず、ゆく舟も見えわかず、
たゞ光るほそき月、
金無垢のほそき月。（明治大正詩選）

三　こゝろ

北原白秋

葛飾の眞間
千葉縣東葛飾郡
市川町大字眞間
東京の東三里江
戸川の左岸近く

私が葛飾の眞間の龜井坊といふ廢れた古い庵寺に、一夏妻と二人で佗びしい住みかたをしてゐた時のことである。ある闇のころであつたが、何氣なく庭に下りて、籬の外に出て見ると、そこには廢れた田圃があつて、あたりの八手や小竹や、葛の葉のしげみに思ひがけなく螢がちら〳〵してゐた。嬉しいと思つたので「出て見ないか、おい、螢がゐるよ。」と內の方へ聲をかけた。「あら。」と妻の方も驚いた聲をたてたが、そゝくさと走り出して來たものだ。手には圓い白いものを持つてゐる。團扇である。私も驚いて、「その團扇はどうする。」と聲に出したが、それがやゝ强かつたか、妻もびくりとしたけはひで團扇を背後に隱した。隱した。そこまで氣がつけば有難い。しかし人から訊かれてはじめて氣がつくのではおそい。私は妻に云つた、「氣がついたらいゝが、螢がゐると聞いたら、たゞ飛んで來ればいゝ。はつと思つた拍子にすぐに團扇と感じて手にするといふ風では、あまりに心の修養が足りない。團扇は何のためか。むろん螢をはたきおとすつもりである。すると、螢はたく、團扇と三つ一緒になつてはつと思つたのである。ことに螢に團扇は昔からのつきもので、

はつ
はつと思ふ

提燈の繪にも商店の團扇繪にもざらにある。第一に古くさいではないか。螢と聞いて直に捕るといふ心を起すのも淺はかである。さういふ『はつ』では困つたものだ。私ならたゞ飛んで出る。觀ようと思ふばかりで出る。それから綺麗だとか、悲しいとか、寂しいとか、あはれだとか、色や光や物蔭の樣々をもしみじみと觀て感ずる。それはその人の心の高下にもより、悲みの深さ淺さ、趣味や學問の廣さ狹さにもよる。色々に見える。それから歌にもなれば、詩にも繪にもなり、言葉にもなる。何事も平常の心懸次第である。修養次第である。平常心を尊く磨いて置くことである。而も素直に鮮かに心から驚くことである。はつと思ふにも思ひ方がある。さうでは無いか。」と私が云つたので、妻も「全くさうでございました、濟みません。」と頭を下げた。

「私に濟むも濟まないもない、あやまるなら、螢にあやまりなさい。」私も笑ひ出した。

私のいふのは螢を捕るのは殺生（セッショウ）だ、生きものを殺すものではないといふ、世のいはゆる道德的な見方からばかりではない。もつと深い詩人としての心から、私の詩や歌の道の上から來た言葉である。

心柄（ココロメラ）といふものはほんの一寸した言葉の端にも現れるものである。

私の居た寺の坊さんに、或時銚子（チョウシ）行の川蒸氣の話が出たので、「此處から銚子まではよほどでせうね。」と訊くと、「いや、たいした賃錢でもありません。」と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊

さんはたいへんなことを答へたのである。坊さんはこの一言で、飛んでもない俗僧であることを私に知らせて了つた。

また、かういふことがあつた。

或歌自慢の人が、眞間に尋ねて來て、私に歌を見てくれと云つた。大概かういふ人の見てくれは敎へてくれといふのではない。驚いてくれ、褒めてくれといふのである。私はさういふ人の心持はよく分つてゐるし、程々にしてゐる。かういふのはいけないのだと云つたところで、逆上せてゐるので分らう筈はなし、先方でほんとに敎はりたいといふ謙つた心が無い以上、私の方でもむきになつてやりこめる必要は無い。なるべく精々批評の水準線を低めて、少しでもいゝところがあれば、それを見てやつ

て、まあ結構ですぐらゐにして了ふ。でなければ第一私の時間が役にも立たぬ事でつぶれて了ふし、たゞもう頭を下げて一時も早く返して了ふ方がよい。何を云つたつて、お天狗さんには分らないのだから、ひとりでに歌のむつかしさに恐れ入つて、始めて顏を赤くする時節を待つてやるより外はない。獨で居て、自分の歌に顏が赤くなればしめたものである。

そこで、その人もさういふ人だとすぐに見て取つたので、まあ散歩でもして見ようと一緒に外に連れ出したものだ。歌の自慢など聞くより、外へ出て雲でも見た方がどれだけせい〳〵するか知れない。どうせ時間をつぶすならその方がよい。その人は途々も何かしらしやべくつてゐたやうだが、私は夕方の空や田圃の景色にばかり眺め入つてゐたのである。

まだ赤い夕燒が西の空には殘つてゐた。眞間の小川の土手の上を歩いてゐると、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模樣だつたらう、私は思はず立ちどまつて了つた。

其處には鮮かな裏白の葉の河楊が水の面に搖れてゐた。其の撓んで搖れ動いてゐる一つの枝にはまだ小さな燕の子が一羽留つてゐた。又一羽來た。枝は愈〻搖れる。枝の先は水へついて波を立てゝ居る。燕の子達は紅い頰を揃へてさも〳〵恐しさうに啼立てる。又一羽留ると枝はいよ〳〵搖れ出した。ともすると滑り落ちさうになるので、今は必死となつて縋りついてゐる。そのつや〳〵した黑い裂羽、いたいけな啼聲。それだけでもかはいゝのに、また一羽羽たゝいてつい近くまで

はやつて來るが、枝の上の燕の子はそれを見て、慌てゝはいけない、いけないと啼く。これ以上留つては枝がすつかり水につかつて了ふのである。空の一羽は、留るには留られず、寂しさうに啼きながら翔つては近より、近よつてはまた翔り出す。

その燕に向つて小石を投げたのである。

私ははつとしたがそれでも默つてゐた。寂しい氣持で微笑みながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さうして或處までその人を送つて行つてから、「左樣なら、またお出でなさい。」と別れの握手をした。それで歌は到頭見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの歌か分つて了つたのである。無論どれだけの歌を作る人かも分つてゐる。

何故か。

それはその一事で、その人の人柄がまだ出來てゐないといふのが、はつきりと私に分つて了つたからである。心ができなければ歌はできない。

少しでも心の修業、ことにこの道の修業が積んだ人なら、また少しでも繪や音樂の事が分る人なら、夕燒の空にまづ心惹かれる。眞間の小川の薄明りにまづ心を唆られる。その薄明りの中に河楊が搖れてゐる。搖れる小枝に心も搖れる。搖れる小枝は燕の子が動かしてゐる。燕の子も動いてゐる、啼いてゐる、しがみついてゐる。これだけでも生きた燕の生を感ずる事ができる。小さな燕にも大自然の生が搖れに搖れてゐる。繪の方から見ても黑と頰紅と、白と綠の葉と、撓んだ枝と水の色と夕燒と、これだけでも立派なものである。音樂の方から云つても、何物

にも微妙なリズムのあらはれがある。みんな動いてゐる。樣樣に强く弱く搖れてゐる。それに一羽來、二羽來、空にも一羽留りもやらず翔つてゐる。あはれは益〻深く益〻搖れるばかりである。觀た眼から云つても、三羽すり寄つてしがみつく姿はいゝ。近よりかけて枝が搖れるのに驚く燕の形もいゝ。それらの動くリズムも愈〻細かになるほどいゝ。燕の心そのもの、生そのものを深く觀て、その心を自分の心とし、その生を自分の生とおんなじに觀る、私達の突きつめた觀照からも、それは立派な象徵の詩や歌そのものである。

これだけの事は、一寸見た瞬間に、自分の頭に這入つて來べき筈である。眼で見、耳で聽くだけはまだしも、靈全體ではつと感じる位でなければ、歌や詩は出來ないのである。

三　保の富士　（久保田米僊筆）

ジユオンテキ
キとしユうセイサク
キンメイキン

その人ははつと思つたが、小石を投げた。

人間が出來てゐない。詩人として修業が積んでゐない。歌などは見なくとも分つてゐる。くりかへしても云ふが、これはあはれな鳥や小蟲をいぢめてはいけないと云ふやうな、修身や説教の心持ばかりでは無い。自分の道とする所から、もそつと深く美しい心持で云ふのである。

（洗心雜話）

野口米次郎
詩人
英詩人
慶應大學教授
歐米に在ること三十餘年ヨネノグチとして知られてゐる
明治八年愛知縣津島町生

四　富士禮讃

野口米次郎

私は見すぼらしい田舍の一少年として、はじめて船で四日市から東上する朝の海上に富士山を眺めた。あゝ、其の時……寒風肌を劈く二月の朝であつたが、私に對する自然禮讃の幕は切つ

四日市
三重縣四日市市津島から南へ七里

四年前
大正九年

觀音岬
横須賀市の東に出てゐる岬三浦半島の極東端で

て落された。私はこの莊嚴無比な神の表象を始めて見て、且畏れ且敬つた。私がもしこの時、富士山から詩の暗示を得なかつたならば、詩人としての私の人生は開かれて居らなかつたかも知れない。私の自然禮讃は富士山で始り、富士山で終つて居る。私の詩人生活も富士山で始り、富士山で終つて居る。實際、詩人の一生は、自然禮讃の四文字に盡きて居る。

「詩人として私はいつも第一印象に支配される。自然の現象が、それ〴〵特殊の姿を見せるのは、始めて接する刹那に於てだ。」

「私は十六歳の時始めて富士山を見てから今日に至るまで、幾度富士山の姿を近くから、又遠くから眺めたか知れない。」四年前の渡米の際のことだが、船が觀音崎を離れて二三時間もたつと、薄い灰色の暮色が段々と濃くなつて行つた。甲板に立つて見

上總の富津洲と共に東京灣の咽喉を扼してゐる

捨てた日本の空を遙かに眺めると、しよんぼり私を見送つて居るものがある……何物か、これこそ、紫色に空をくつきり染抜いた富士山の圓錐體だ。時も時であるが、私は此の時位、遣瀬ない物寂しい孤獨の感に打たれたことは無かつた。私は聲こそ出さなかつたが、滂沱たる熱い涙を流した。又この時の富士山ぐらゐ美の極致を暗示する世にも尊い姿はなかつた。しかし私が目をつぶつて、心の中に富士山を描く時顯れて來る姿は、私が十六歳の時に始めて接した富士山である。私は長い年月を外國で費したものだが、私の勇氣が急に挫けた時、「われはお前を守護して居る、恐れずに起てよ、起つて大空高く上らねばならない。」と私に勢を附けてくれたものはその富士山であつた。私が失望の闇の中に落ちて自分の進むべき道を知らなかつた時、「われ

富士山

はお前を導いてやる、道は一筋だ……正義の道には努力の花が咲く、そこには神聖な空氣が滿ちる、お前は復活せねばならない。」と私を勵ましてくれたものはその富士山であつた。「われは階段となつてお前を天に上らせよう。」「われはお前に教へて神祕の門戸を開けさせよう。」「われはお前を導いて祈禱の殿堂に這入らせよう。」と語つて、私の守護神となつたのは私

ビンヨン　英國の詩人著述家　Binyon (1869—)

ムーア　英國の詩人小說家戲曲家批評家　Moore (1853—)

が始めて眺めた富士山であつた。　私はその富士山のお蔭で、その富士山の祝福を受けて、少なくとも單純の心と高潔の思想がどんなものであるかを理解して、詩歌の道を歩くことが出來た。私はそれを喜び、それに依つて生きて來て居る。

私はこゝで私の忘れることが出來ない一挿話を語りたい。時は二十一二年前の冬で、場所は驚くべき霧が鯱か鮫のやうに跳廻るといふ倫敦だ。　私はこの薄氣味惡い、地獄の幾町目かとも思はれる倫敦の町中を、出版者から輕蔑された詩の原稿を後生大事に握りながらうろつき廻つた。　ある一夜、詩人ビンヨンに伴なはれて詩人でもあり又美術家でもある、ムーアの招待會へ出掛けた。　その晩も私の心は暗かつた、冷かつた。　ビンヨンの言葉で出掛けるには出掛けたが、私は談話する勇氣さへ無かつ

北齋　葛飾北齋　德川末期の浮世畫師

凱風　南風

た。　私は私の詩を認めてくれない英國に對して熱烈な反感を持つて居つたのである。　ムーアの宅へ着くと、部屋には既に澤山のお客が集つてゐて、談話は岸を打つ海の潮の聲のやうに高まり、部屋の中は倫敦の夜のやうに煙草の煙で濛々として居つた。　「無名の私は宛も鮠か諸子のやうに客と客との間を寂しく獨り泳ぎ、我ながら勇氣が無く日東男子の沽券に關ると思つた時、私はふと部屋の壁の上に懸けてある北齋の富士を見た。……「凱風快晴」の一枚だ。　代赭色の圓錐形を堂々と兀立せしめた木版繪だ。　私は富士山が語るやうに感じた、我を見て起て。　西洋人を睥睨して東海詩人の面目を發揮せよ。　恐れてはならない。慄へてはならない。　我はお前に命令する。　勇氣を出せ。」　私は直に生氣が五體を震動させるやうに感じた。　私は直に多辯に

なつた。私は直に快活になつた。その時から倫敦の澁面は笑ひ始めた……私の詩集も世に出ることになつた。私は英國文壇に打勝つた。私はどの位、富士山に負ふ所があるか知れない。實際、私は富士山の守護で、少なくとも詩人としての人生を開拓して來たといつても過言でない。私が英國での第一詩集「東海より」を富士の靈に捧げたのも、當然私が拂はねばならない敬意の一端を表示したものに外ならぬ。（ヨネ、ノグチ代表詩）

嘉納治五郎（ジゴロウ）
教育家
前東京高等師範學校長
貴族院議員
萬延元年（一八六〇）
攝津西灘生

五　偉人

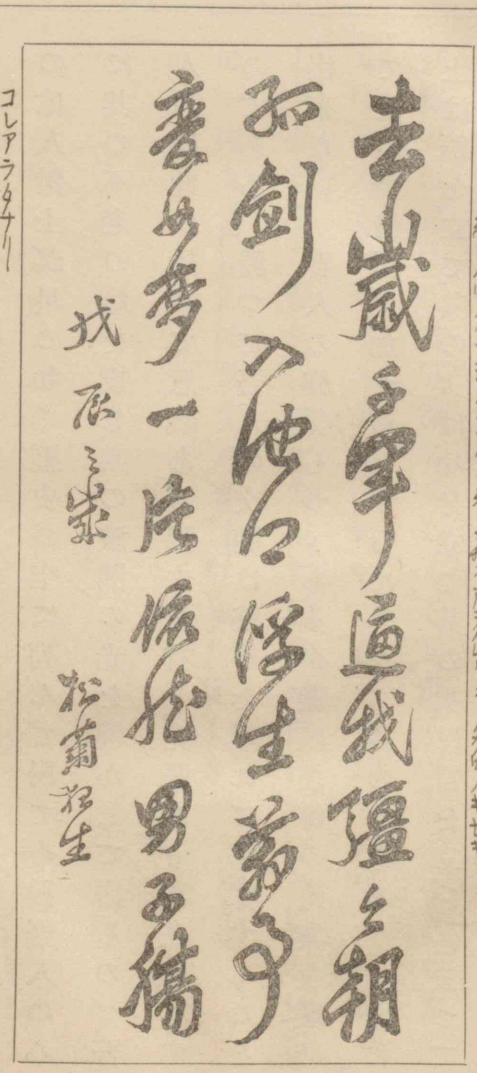
嘉納治五郎

古來の生民蓋し幾萬億、其の中より卓然として崛起し、功業德澤炳として萬世の下に輝いて居る者は實に彼等偉人である。若し偉人を人類の歷史から除き去つたとすれば、吾人の過去は如何に暗憺として如何に寂寞なものであらうか。幸にして幾多の偉人、傑士が星の如く歷史の空に列んで居て、今猶吾人の心中に其の不老の輝を投じ、其の破闇の光を耀かして居るので、吾人人類は此に始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。「隨つて吾人の文明は彼等を離れて解釋することは出來ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して之に新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は德を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ。」と云つてあるが、德にもあれ功にもあれ言にもあれ、彼等が人類に及した影響は不朽不滅である。凡そ世の中に壯快といへば、偉人の事業より壯快なものはなく、崇高といへば、偉人の人格より崇高なも

大上は
大上有レ立レ德、
其次有レ立レ功、
其次有レ立レ言。
雖レ久不レ廢。
此之謂二不朽一。
（左傳）

のはないのである。

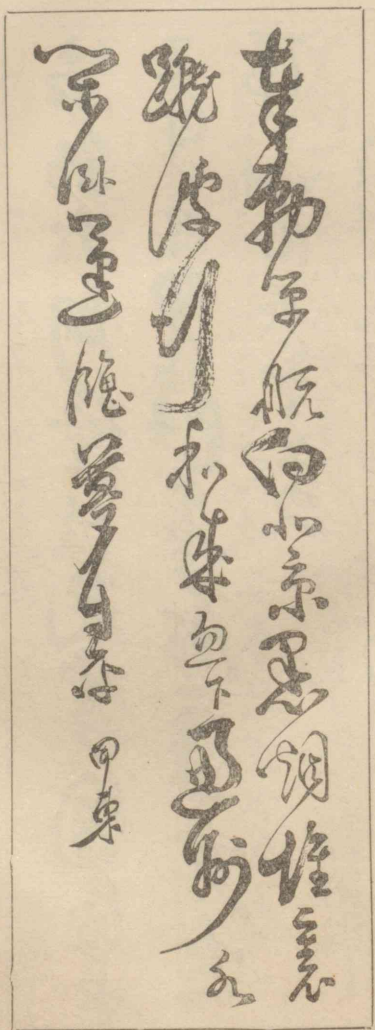
試に思へ。「我が國が明治の御代になつてから長足の進歩を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、其の直接の原因は王政の維新にあるのである。さうして王政の維新は幾多の偉人・傑士の努力奮闘より生じた結果である。」「至誠皇室を尊び、



去歳千軍逼二我疆一。今朝孤劍入二他鄉一。浮生萬事變如レ夢。一片依然男子腸。
戊辰之歳　松菊狂生。

木戸孝允筆蹟（末松謙澄藏）

夷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して經國の大本を定め、謀慮深遠・規畫周密、大いに皇猷を賛したのは、彼の木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、沈毅端嚴、善く謀り善く斷じ、時局の紛難を處理すること、快刀の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風、よく上下の信頼を得て國家の柱石となつたのは、彼の大久保甲東であつた。「光明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して、泰

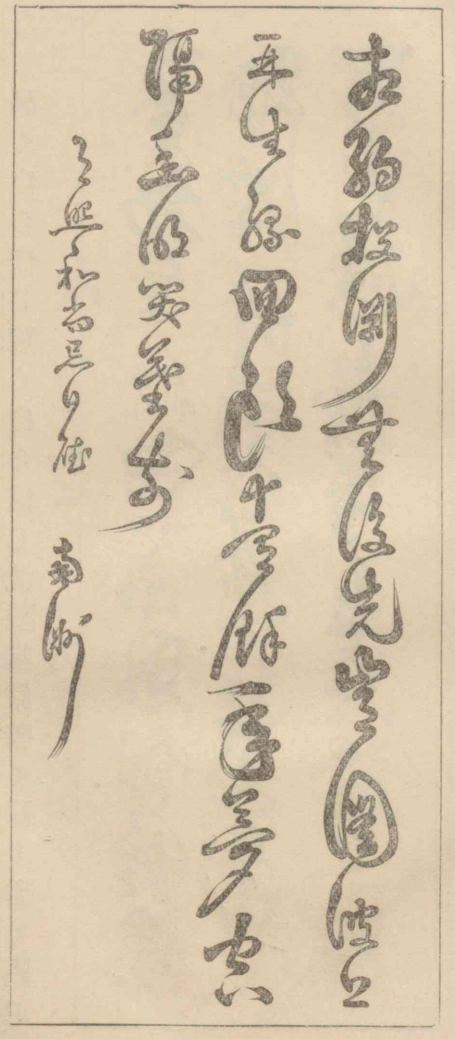


奉レ勅單航向二北京一、黑煙堆裏蹴レ波行。和成忽下二通州水一、閑二臥篷牕一夢自平。甲東。

大久保利通筆蹟（得能通昌藏）

相約投レ淵無二後先一、豈圖波上再生緣。回レ頭十有餘年夢、空隔二幽明一哭二墓前一。月照和尚忌日賦。南洲。

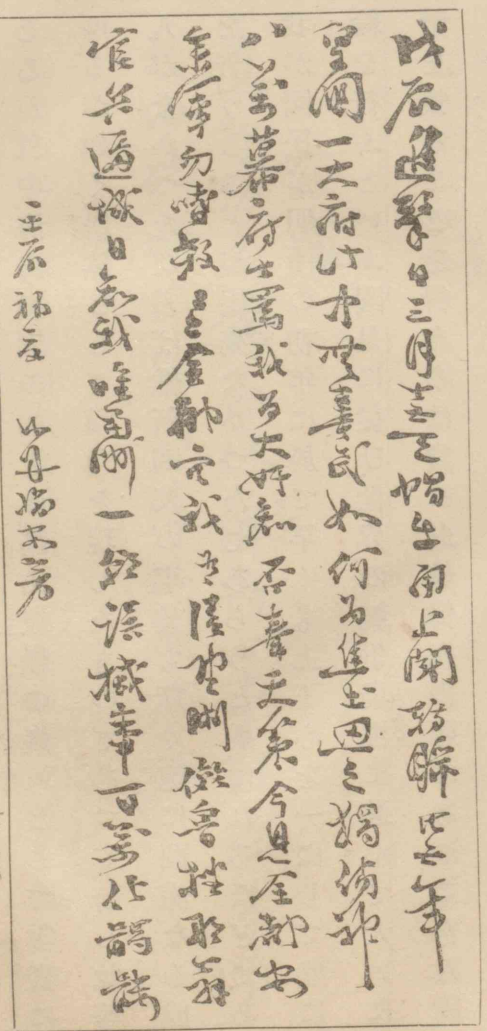
然として動かず、曠懷偉度、清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、談笑して天下の勢を制し、國家を磐石の安きに置いたのは、彼の西郷南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西郷の量、三者相俟つて此に天地を旋轉するやうな大業が成就せられたのであつて、世に維新の三傑と稱するも亦偶然でないのである。



西郷隆盛筆蹟（西郷隆盛記念碑所刻）

戊辰進擊日、三月十五天。蝸牛角上鬪、轉瞬廿五年。皇國一大府、此中無辜民。如何爲二焦土一、思レ之獨傷レ神。八萬幕府士、罵レ我爲二大奸一。知否奉天策、今見全都安。參軍勿レ嗜レ殺、嗜レ殺全都空。我有二清野術一、倣二魯挫二那翁一。官兵逼レ城日、知レ我唯南洲。一朝誤二機事一、百萬化二髑髏一。壬辰初夏。海舟勝安芳。

當時彼等三傑が同心戮力して經國の大業を建てつゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海舟の如きがあつて、よく時艱を濟つたのであつた。海舟人となり雋異卓拔、其の炯々たる眼識はよく時局を大觀し、機略縱橫、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を擧げしめ、生民をして塗炭の苦を免れ



勝安芳筆蹟（書畫大觀）

しめたのであつた。

維新前後は我が偉大なる國民精神の最も著しく發揮せられた時で、偉人・傑士の風雲に乘じて起つたものは甚だ多かつたのであるが、就中、海舟・南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業も斯く速に圓滿なる成功を告げることが出來なかつたであらうと疑はれるほどである。

我が國民が明治の初年に於て、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に從ひ、世界の競爭場裡に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜であつて、吾人國民が景慕の情を傾けて、之が傳を立て、之が像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせる今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いて居るやうに思はれるのも意味のあることである。

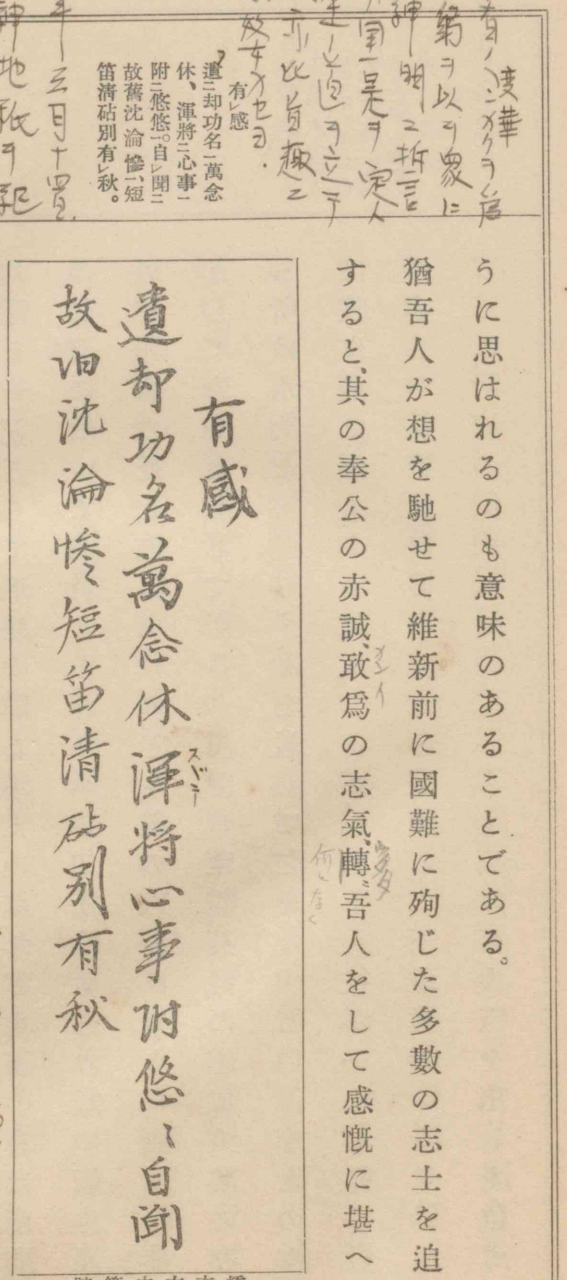
猶吾人が想を馳せて維新前に國難に殉じた多數の志士を追懷すると、其の奉公の赤誠、敢爲の志氣、轉吾人をして感慨に堪へざらしむるが中にも、吉田松陰・橋本景岳の如きは、最も強く吾人の注意を惹くのである。西郷南洲は常に「余は先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本左内を推す。二子の才學器識はとても吾が輩の及ぶ所でない。」といつた。時に南洲は三十歳、景

我国未だ有ノ淡薄サ・トシ・朕鄙ヲ以テ衆ニ先ジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯ノ国是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立テントス、衆亦此旨趣ニ基キ協心戮力セヨ。

遺却功名萬念休、渾將心事附悠悠、自聞故舊沈淪惨、短笛清砧別有秋。

有感

明治元年三月十四日、天皇天神地祇ヲ祀リ天地神明ニ誓ヒ之ヲ勅語ヲ諸々スル



橋本左内筆蹟
（加藤嶽藏維新志士遺芳帖）

身を殺して

子曰、志士仁人無二求レ生以害一レ仁、有二殺レ身以成一レ仁。（論語）

五人の大臣

岳は二十三歳の齡であつたことを思ふと、景岳は我が國の青年偉人中に最も卓越せる者といはねばならぬ。かれ叡智靈覺涌くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て、政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。彼は不幸にして二十六歳を一期として刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として青史を照して居る。忠愛の至誠、英發の志氣、大義の存する所は水火をも避けず、身を殺して仁をなすといふ志士の本領は、彼に於て最もよく見ることが出來る。彼が一小私塾の教育に盡した熱誠は、幾多の志士を輩出して王政維新の急先鋒とならしめ、明治の御代になつてからも五人の大臣を出した位であ

伊藤博文
山縣有朋
山田顯義
品川彌二郎
野村靖

つた。吾人は松陰・景岳に依つて英偉なる人物が少壯期に於て既にかくも貴き事を爲し得るを知ると共に感歎の情に堪へないのである。

かく吾人は明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受けて我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んで其の先蹤を繼ぐことを務めねばならぬ。賴山陽は十四歳の少時に、

十有三春秋、逝者已如水。天地無二始終一、人生有二生死一。

安得レ類二古人一、千載列二青史一。

と歌つた。古來の偉人が少年青年の時よりして漸く發達した

逕路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して、感憤興起したのに基づいて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、此の情の生ぜぬものは、其の志、多くは低劣で、其の行亦多くは鄙陋である。吾人は前偉人に活理想を求めて、此に志氣を振ふことが出來るのである。志氣が振つて、此に向上發展の途に就くのである。

固より、古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したものもある。偉人の事業には、時代の大勢が與つて其の背後の力となつて居るものもある。それで偉人を學ぶものが、誰も皆偉人となり得るといふことは難い。併し偉人を學ぶことに依つて、天才ある者は益〻之を英偉に發揮することが出來、凡庸なものも其の人として最高度の發展を爲し得るのである。孟子は「聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く鄙夫も寛なり。百世の上に奮ひ、百世の下、聞く者興起せざるなし。」と云つた。偉人を學ぶべき者は、獨り偉人には限らない、懦夫も鄙夫も、皆偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せられ、感化せられ、指導せられ、以て向上の生活に進むのである。

聖人は百世の師　孟子曰、聖人百世之師也。伯夷柳下惠是也。故聞二伯夷之風一者頑夫廉懦夫有レ立レ志。聞二柳下惠之風一者薄夫敦鄙夫寛。奮二乎百世之上一、百世之下聞者莫レ不二興起一也。非二聖人一而能若レ是乎。而況於下親二炙之一者上乎。（孟子）

且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられたものが、他日巍々として衆目を驚かすやうな發展を爲し得た事が少からず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄するを要しないのである。前に列擧した維新前後の六偉人の如きも、何れも皆微祿の士であつた。南洲特に海舟の如きは眞に赤貧洗ふが如きもの

であつた。松陰・景岳の如きは、生來虛弱多病であつた。南洲の如きは少時極めて魯鈍といはれたものである。松菊・中東の如きも、少時は意氣の壯なのみで、特に英才の煥發したわけではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建つるに及ばず、不幸にして夭折したならば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは何もなかつたであらう。此等のことを思ふと、「我も人なり、彼も人なり。」といふ思想は、決して僭越狂妄として排斥すべきではない。

「王侯將相寧種あらんや。」といひ、「英俊とは凡常の士の發憤勉勵したるものゝみ。」といつたのも無理ではない。顏淵は「舜何人ぞ、予何人ぞ。」といつた。有爲の士の志を立つることは常に此の如きものである。

王侯將相
壯士不レ死卽已。死卽舉二大名一耳。王侯將相寧有レ種乎。（史記）

今や我が國は世界の日本として大活動大發展を爲すべき時に臨んでゐる。公私各般の事業に於て英偉なる人物を要することが甚だ急なのである。今日の多數青年の中、誰かよく前英に續ぎ、來者に先だつて大業をなすであらうか。偉人を師として奮起するは終生の最大快事であつて、假令運命は其の人をして偉人の名を成さしむるに至らずとも、我として最高の發展を爲し遂ぐることを得たならば、人生の目的は此に達せられたと謂ふべきではあるまいか。（青年修養訓）

六　妹にさとす

吉田松陰

この間は御文下され、觀音樣の御洗米、三日の精進にていた

妹
吉田松陰の長妹千代子
この文は安政六年四月十三日松陰が萩の野山の獄中から贈つたもの

吉田松陰
名は矩方
通稱は寅次郎
長門藩士
勤王家
教育家
安政六年(一八五九)
刑死
年三十

だき候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進潔齋などは、隨分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日(ツゴモリ)まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度靈神樣御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候へども、當所にては、あたりまへの精進の外にまた精進と申候うては、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日よりさいはひ精進日なれば、その日一日に戴き申候。

そも〳〵觀音樣信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品と申すに、觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、

ちんぢ
方言で微塵などの意

吉田松陰　(松浦松洞畫吉田家藏)

繩目にかゝり候へば忽ちぶつぶつと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれあり候。これは拙者江戸の人屋にてこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに

分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申候へば觀音は右の經文の通のものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは人に信をおこさするためなり。信を起すとは一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うてもちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ、世の中に如何に難題苦患（ケゝン）の來るとも、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣ひはなし。されど初より凡夫に、一心不亂ぢやの不退轉ぢやのと申しきかせても、少しも耳に入らぬもの故に、かりに觀音樣を拵へて人の信を起させ候教に御座候。之を方便とも申

都上り
法華經第七化城喩品にある

天竺王
迦比羅城主淨飯王

一士道莫大於義義因勇行事
因義長
一士行以質實不欺爲要以術
詐文過爲恥光明正大皆由
是出
一成德達材師恩友益多
百取天子愼交游
一死而後已四字信簡而義
該堅忍果決確乎不可拔
者舍是無術也

二十四孟子

吉田松陰筆　士規七則（松下村塾藏）

候。これにつきて、法華經に都上りの喩これあり、至極面白く候へども、事長ければ略し申候。

さてまた大乘と申す方にては出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王（ダクラ）の

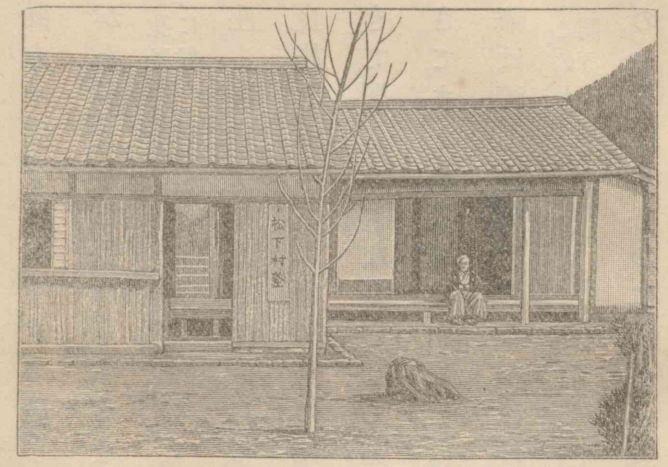
若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てゝ、年二十五の時位を棄てゝ山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。（これにも色々有難き話があれども事長ければ略す。）さ候て三十出山として、僅か五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て來て、それより世の人を教化せられたり。これが卽ち出世法なり。故に、出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、卽ちこの世の人を濟度することに御座候。

人間萬事
淮南子にある話

さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す御方々は、今日迄生きて居らるゝ故、人が尊みもすればありがたがりもし、畏れもするなり。果して死なぬに候はずや。（孔子の教もやはりこの通に候へども事長し略す。）死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通には候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。卽ち刀のちんぢに折れたる證據なり。さてまた「禍福繩の如し。」といふ事を御悟なるが宜しく候。禍は福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。（このわけは物知に問うて知るべし。）拙者など人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも殘り、かつ〳〵死なぬ人々の仲間

入も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、又如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし、何の効驗もなき事に、觀音に頼みて福を求むるやうの事は、必ず〳〵無益に存候。

尤も右の通申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分とも御存あるべきか、こゝにまた



松下村塾

圖中絲がはに腰をかけてゐるのは松陰の兄民治

易の道
天道虧レ盈而益レ
謙

七人兄弟
杉民治
吉田寅次郎
杉千代子
兒玉兵衛門妻
杉壽子
小田村素太郎
妻
杉艷子
杉美和子
久坂義助妻
杉敏三郎
ふざま
方言で運の意

論あり。易の道は滿盈と申すことを大いにきらふなり。御互に七人兄弟の内、拙者は罪人、艷は夭折、敏は啞子、ふざまのわるきやうなるものなれど、あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に兄様・そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。是程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の内にはふざまのわるき人も隨分あるなり。然れば父母兄弟の代りに拙者・艷・敏の三人が禍を引受くることゝ御思ひ候はゞ、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。且杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却て杉が氣遣なるものなり。拙者身の上は前に申す通、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間な

山宅　杉常道隱棲の地萩城の東方護國山の麓に在つた

小太郎　兄民治の子

れば、後世の福は隨分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき事なれば、子供等がいつもこの樣なるものと思ひて、昔山宅にて父樣・母樣の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣なる者にては候はずや。　去年も端午に客の多きを人はめでたしめでたしと嬉しき顏をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にてたまらぬゆゑ、始終稽古場に屈みて、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の事なりき。

もしや、萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危し〳〵。　父母樣の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。　小田村にてすら山宅の事はよくは覺え

て居るまじ。　まして久坂などは猶以てのこと。　されば拙者の氣遣に觀音樣を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本。」と申す事をとくと申聞かする方が肝要なり。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。　兄弟のうちに一人にてもふざまのわるき人あれば、あとの兄弟は自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。　これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者のかはりに父母樣に孝行してくるゝがよし。　さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母樣の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めでたき事はなきにあらずや。　よく〳〵御

勸辨候うて、小田村・久坂などへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、をり〳〵御見候へかし。心學本に、

のどけさよ、ねがひなき身の神まうで。

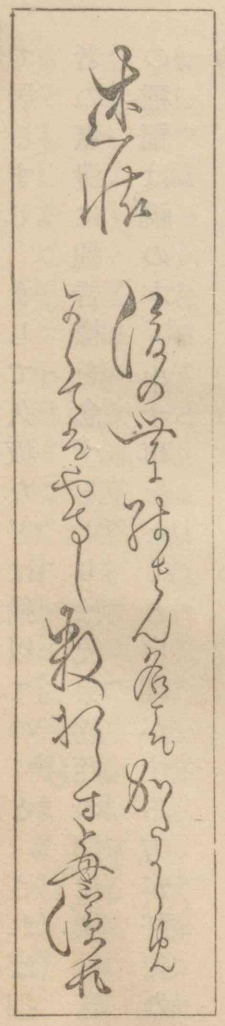
神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。（俗簡樣輯）

清水濱臣
國學者
通稱玄長
家を泊酒舍と號す
文化七年（一八一〇）
歿
年四十九
述懷
後の世に殘さん名こそかたからめかくてはやまじ數ならずとも
濱臣

〇七　擣衣（キヌウチ）

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。かりがねの聲の砧（キヌタ）を誘ふにやあらん、砧の音のかりがねに通ふにやあらん。あなあやし（キメウガ）、〳〵。そもこの音の悲しきか、住む里の淋しきか、打つ折の憂き故か。みなあらず。きく人の心のさびしきなり。（泊酒舍集）



清水濱臣筆蹟

八　名物（川柳）

名物を食ふが無筆の旅日記
うら〻かさしきりと錢がほしくなり
千客萬來皆來ると困るなり
轉寐の顏へ一册屋根にふき
武者一人叱られてゐる土用干

式ノ気ヌセヲ書キコミ人ジヤテイノナイ物ヲハイク。ユツケイ味有リ気セツメ要旨ナク都會人ノ四人毛ヲ見タ物ガタヽン（川柳）

雷をまねて腹掛やつとさせ
本降になつて出てゆく雨やどり
雨やどり額の文字をばよく覺え
抑へればすゝき、放せばきり〴〵す
よつびいてひようと放さぬ案山子かな
手の甲へ餅を受取るすゝはらひ
通りぬけ無用で通りぬけが知れ
泣く〳〵も良い方を取る形見わけ
芭蕉は飛びこみ、道風は飛びあがり
釣れますかなどと文王そばへ寄り　ブイコウ王、シユンノ文王

室鳩巣
名は直清
通稱新助
江戸の人
木下順庵の門人
幕府に仕へて殿中侍講となつた
享保十九年歿
年七十七（一三六一―一三九四）

楊巨源
唐の人

九　手折りし枝に吹く春風

室　鳩　巣

「盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志を變へぬは、これまた士の常なり。もし世の模樣につきて覺悟を變じ、世話にいふ襟もとにつくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。」

水邊楊柳綠煙絲、
唯有春風最相惜、
立馬煩君折一枝、
慇懃更向手中吹。

これ唐の楊巨源が詩なり。此の三、四の句意、婉にして面白く覺え侍り。よりて其の意を翁が詠める歌に、

なれて吹く名殘やをしき、青柳の
手折りし枝をしたふ春風。

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほ其の手折りし枝を

源平盛衰記　源平兩家の盛衰を叙せる軍記凡て四十八卷

東鑑　高倉天皇の治承四年頼朝が伊豆に起つた時から宗尊親王に至るまで鎌倉將軍六代の間の記錄凡て五十二卷

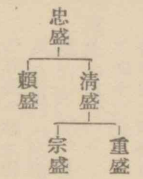
池魚の災　城門失レ火、殃及二池魚一。（東魏の杜弼の梁に檄する文）

去りやらで惜み顏に吹くこそ、いと優しくおぼえ侍れ。古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心を變へぬに譬へつべく候。翁むかし源平盛衰記を讀みて、源氏の士には渡部瀧口競、平家の士には彌平兵衞宗淸が事を感ぜしが、東鑑にて伊東九郎祐淸が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を半ば撰び置きしかど、未だ稿を脫せざるうちに池魚の災に罹り、其の後再び草を起す事もなく打過ぎし程に、今は其の文をば跡もなく忘れ侍り。渡邊競は源三位入道頼政が所從の士には第一の者なり。然るに治承年中、頼政高倉宮を勸めて兵を起しゝ時、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、打忘れてやありけん、競に斯くと知らせざりし程に、競暫く猶豫して家にありしを、平宗盛聞きて、日頃競が魁偉なるを見て、己が所從にせまほしく思ひしが、頼政が親

六波羅　京都鴨河の東で宗盛等の邸第のある處

臣なれば請ふべきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に殘りしと聞きて、「六波羅に參れ。」と人をして言はせければ參りけり。宗盛對面して、「汝今より我に仕へば入道の恩には優るべし。」とて小糟毛といふ馬に貝鞍おき、乘替の料とて遠山といふ馬を引きそへ、黑絲縅の鎧・兜まで皆具してたびけり。競畏まり賜はりて、ほくそわらひして罷り歸りぬ。一族家人打寄りて、「入道殿是程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取殘されては、眞實に遺恨なり。大將の斯くうちたえ語らひ給ふは辭み難し。『時の花をかざしにせよ。』といふ事もあれば、たゞ此の儘にてあれかし。」といふを、競、「いやとよ、勇士の義さはあらず。」とて、宗盛より賜はりける鎧着て、小糟毛に乘り、郎等七騎打連れて、三井寺へと打出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬に乘りながら門の內を覗きつゝ、高聲にい

三井寺　近江國園城寺大津市にある



ひ入れけるは、「競こそ只今下し賜はりし馬に乘り、三井寺へ罷り越し候へ。　御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、このたび死をともに致すにて候ふ。　御門前を空しく打過ぎんは本意なく候へば、御暇を申し候ふ。」とて三井寺に到り、賴政と一所になりしが、其の後宇治橋の合戰に潔く討死してけり。

彌平兵衞宗清は平賴盛の士なり。　平治の亂に、賴朝幼少にて賴盛の家に囚はれしを、賴盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。其の時宗清、賴朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落ちし時、賴朝かねて賴盛に通問して、疎意なき由を言はせける程に、賴盛獨り一門に叛きて都に留まりける。　其の後平家未だ亡びずして西海にありし時、賴朝舊恩を謝せん爲に賴盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召し具せらるべき由をいひおこされければ、賴盛

關東に赴くとて宗清に、「いざ連れて下らん。」といひしに、宗清いひけるは、「賴朝某に下れと候ふは、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領・引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく候。　今更源氏に諂ひて其の蔭により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜しうこそ候へ。　君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候ふ。　こゝにて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。　鎌倉に御越し候うて、賴朝某が事を尋ねられ候はゞ、折節勞る事ある由を仰せられて賜はり候へ。」とて鎌倉へは往かざりけり。　其の後西海へ下りけるにや、其の終を知らず。

伊藤祐清は伊藤祐親が第二子なり。　賴朝伊豆に流謫の時、祐親

石橋山
相模國足柄下郡石橋小田原の南一里

篠原
加賀國江沼郡片山津の近く齋藤實盛の討死した處

に依りておはせしが、祐親、頼朝を害せんとするを祐清悲しみ、頼朝を深く愛護し、密かに逃れ去らしむ。其の後頼朝兵を起して伊豆より相模へ赴きし時、祐親平家の御方として、大庭景親等と石橋山に至りて、頼朝を追ひ襲ひけり。其の後頼朝既に東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて至りしを、其の罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召し出して、勸賞を行はれんとありしに、祐清「唯御恩には早く殺され候へ。父囚はれ、其の子勸賞せらるゝ法や候ふ。もし、我を殺し給はずば平家に歸すべし。」といふに、「されば」とて、我を救ひし者を殺すべきやうなし。」とて赦して放ちやりけり。祐清それよりすぐに京都に奔りて平家に屬せし後、篠原の合戰に遂に討死を遂げけり。この三人、時代も大方同じく、志節も相似

山路愛山
名は彌吉
評論家
駿河國生
大正六年歿
年五十四
神護景雲
稱德天皇

たり。その清風高義、源平の間に求むるに、其の類少く覺え侍り。
（駿臺雜話）

一〇　武士道

山路愛山

「神護景雲三年、朝廷警衛の爲、東人を召させ給ひし時の詔に、「東人は、常に『額に箭は立つとも、背には立てじ』といひて君を一心に護るものぞ。」とあり。東國は蝦夷と境を接して、人種の生存競爭劇しく、戰爭も多かりしゆゑ、自ら健氣なる風を養成したるならん。蝦夷の反亂聞えずなりし後も、天慶以來幾度か干戈動き、大名・小名の私鬪も亦少からず、人氣自ら上國に殊なり。かくて武士道もこの間に成長したり。」

武士道とはいかなるものぞや。一定の釋義を下すはむづかし

我が首
吾妻鏡にある

武將の身
藤原敎長の語
保元物語にある

きことなれども、まづは武士の間に行はれたる面目律ともいふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の厄難の時、日頃髻の中に隱しおきたる觀音の像を取出し、「我が首若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見ば、源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし、それが口惜しければ斯くは取出し奉るものなり。」と云へり。崇德上皇、爲義を白河殿に召させたまひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰を辭退せんとしたるに、使の殿上人「武將の身として、夢見・物忌などは餘に後れたる沙汰なり。」といはれしかば、爲義「實にも。」とて參殿に及びたり。

「宗旨も信仰も、武士に取りては日常の事なり。一旦非常に臨んでは唯何事も惑はず突進するは武士道の極意なり。されば保

勅命
保元物語にある

義平
平治物語にある

侍程の者
平家物語にある
長谷部信連の語

大名は
侍は草の靡き
（承久軍物語）

元の亂に、重盛は「勅命を蒙つて罷向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべき樣やある。」といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、「義平が河より西へ引きつるは家の疵と覺ゆるぞ。今は何をか期すべき。討死せんのみ。」と云ひて、敵陣に馳突したり。

「臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、「額に箭は立つとも、背には立てじ。」とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。「侍程の者が一度申さじと思切りし事を、縱ひ拷問せられたればとて申すべき樣なし。」と云ふが如く、何事も思切つて惡びれぬを武士の魂とす。」

次に其の頃の武士道にて、宗と重んじたるは志の專一なることなり。尤も、「大名は草の靡き。」と云ふ諺は其の頃よりあり。強さ

うなる方に加擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとて輿論は、かく意氣地なきを善しとせしには非ず。主從の義を重んじ、忠を主人の家に盡すを以て、眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に從つて、向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に從ふ武士は、「源氏は二人の主取ることなければ、宣旨なりとて、えこそ內裏へは參るまじけれ。」と云ひしものもあり。「源氏の習、心變りやあるべき。」とて肩を怒らしゝものもあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏の習は左樣に候。」と力みしものもあり。平家に從ふ武士も、忠盛の家の子には、「主若し辱しめられたらんにはえこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上迄も斬り入らん。」と決心したるものもあり。平宗淸は賴朝の恩人にて、賴朝より「關東に來らば善く扶持せん。」と言送りたれ

源氏は
源親治の語
保元物語にある

源氏の習
源義朝の語
平治物語にある
凡そ武士
源義平の語
平治物語にある
主若
平家貞の語
平家物語にある

關東に
吾妻鏡にある

ども、「平家零落の後、賴朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。」と云ひ、直ちに屋島の內府に參り、運命を主家と共にしたり。」齋藤別當實盛は、「吉についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも、我は平家の味方となりて討死せん。」とて、黑く染めたる白髮首を木曾義仲の士に取らせたり。斯く臆病を惡み、主人に忠を盡すを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家が西海に討ちし時、「病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。」とても死ぬる身ならば戰場に死なんとて出陣したる者のことは、吾妻鏡に見えたり。「事あらば眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。」とて、腹搔切つて死したるは其の頃の武士の習なれば、

吉について
平家物語にある

病身ながら
加藤景廉の語

事あらば
平治物語にある
源義朝の語がこれに似てゐる

合戰の場
保元物語にある

我は
保元物語にある

義朝も「合戰の場に罷出でて何ぞ生命を存ぜん。」といへり。されば頼朝が十四歳にして父擊たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりてかひなき生命を助かりしを、時の人は善くも言はざりしなり。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に功名を競ひたる事なり。爲朝が白河殿にて、「我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ。功名不覺も紛れぬ樣に唯一人いかにも强からん方へ差向け給へ。」敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣習を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

但し弓矢の道と云ひ、武士の道といふもの、畢竟自然に生じたる

此の殿は
平治物語にある

武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明かに區別を立て得べきものに非ず。さりとて其の面目律の制裁は、頼朝時代にても中々嚴重にして、武士道に外れたる者は武士の間には生きて居られぬ程なりき。例へば平治の亂に源氏の士ども、藤原信頼を見限り、「此の殿は、人に頰を打たれて、返事をもし給はねば、侍の主には叶ひ難し。」と云ひしが如く、大將若し武士道の心得なければ士卒附かず、侍若し名を惜まず卑怯の振舞あれば、武士の間に齒せ

實盛髮を染める（前賢故實）

られざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりし故、天下の勢遂に上輕く、下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。

さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲には非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往往四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩摩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、それだけにては天下に功を立つることもならざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の、邊土にて武士の片意地なることを憂ひ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移しゝより、薩藩固有の武士氣質と上國の知識とは

島津齊彬
鹿兒島藩主
勤王家
安政五年(一八五八)
薨。年五十

重豪
鹿兒島藩主
外國の事情にも
通じてゐた名君

北條
伊豆の北條時政

三浦
相模の三浦義明

千葉
下總の千葉常胤

小山
下野の小山朝政

此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れるなり。東國の強きのみにては、未だ天下を圖り難し。頼朝は北條・三浦・千葉・小山などいふ東國武士の力を假りたると共に、大江廣元・三善康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。

（愛山文集）

二　神無月の頃

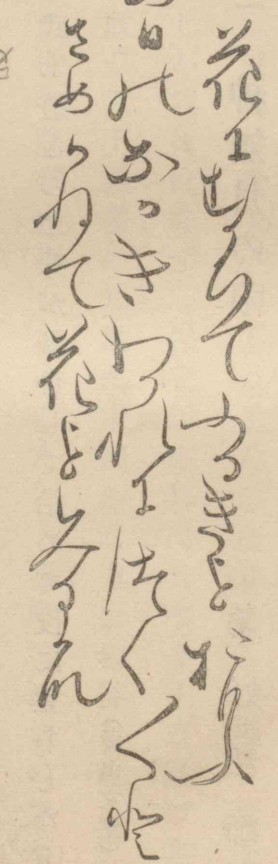
兼好法師

神無月のころ、栗栖野といふ處を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るゝ覓の雫ならでは、つゆおとなふものな

兼好法師
俗名吉田兼好吉野朝時代の文學者
もと京都吉田神社の社家
正平五年(一三一〇)
歿
年六十九

し。閼伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよとあはれに見る程に、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。（徒然草）

筆蹟
花にむかひてふるきをおもふ
春の日のながき
わかれにつくづ
くとなぐさめか
ねて花をみるかな



兼好法師筆蹟（前田侯爵藏）

一二　人のなき跡

兼好法師

中陰
人の死後四十九日

去る者は
去者日以疎
來者日以親
（文選古詩）

卒都婆
楚語
塔婆また塔ともいふ
形は樣々ある
Stūpa

「人のなき跡ばかり悲しきはなし。中陰の程、山里などにうつろひて、便あしく狹き處に、數多あひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたゞし。日數の早く過ぐる程ぞ物にも似ぬ。はての日は、いとなさけなう、互にいふ事もなく、我かしこげに物ひきしたため、ちりぐに行きあかれぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しきことは多かるべき。「しかぐの事はあなかしこ、跡のため忌むなることぞ。などいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心は猶うたて覺ゆれ。年月經ても、つゆ忘るゝにはあらねど、去る者は日々に疎しといへることなれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや、よしなしごといひて、うちも笑ひぬ。

骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐・夜の月のこと

みぞ言問ふよすがなりける。思ひ出でて忍ぶ人あらん程こそあらめ、そもまた程なくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。そのかたぐになくなりぬるぞ悲しき。」（徒然草）

いづれの人
古墓何代人、不レ知二姓與レ名。化爲二路傍土、年々春草生。（白氏文集）

物のあはれは春はたゞ花のひとへにさくばかりものゝあはれは秋ぞまされる（拾遺集讀人不知）

一三　四時のあはれ

兼好法師

「折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人ごとにいふめれど、それもさるものにていま一きは心も浮立つものは春の景色にこそあめれ。」「鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づにたゞ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞいにしへの事も、たちかへりこひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤の覺束なき樣したる、すべて思ひすてがたきこと多し。」

物のあはれ
あじきなきすきごと（おもしろくもあそび）
すきずき（ものるところ）（ものする所）
よしなしごと（ものする所のよい事）
白氏都城行鬼（サウマツコト）

花橘は
さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今集讀人不知）

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ世のあはれも人の戀しさもまされ。」と人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鷄の叩くなど心細からぬかは。六月の頃あやしき家に夕顏の白く見えて蚊遣火ふすぶる

灌佛
四月八日の佛生會

祭
賀茂の葵祭
四月の中の酉の日今は五月十五日

六月祓
六月の晦に行はれる大祓の神事

思しき事
おぼしき事いはぬはげにぞはらふくるゝこゝちしける（大鏡）

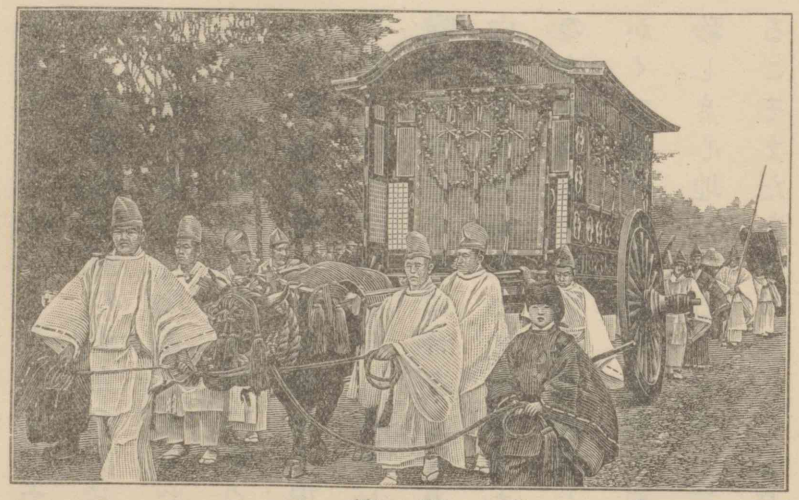
葵祭（行列）

もあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく頃、早稲田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更に言はじとにもあらず。思しき事言はぬは腹ふくるゝ

佛名
十二月十九日から三日間宮中で行はれる佛事諸佛の名號を稱へて罪障を懺悔する法會

荷前の使
年の暮に諸國から奉る貢の初穂を十陵八墓に奉られる使



葵祭（唐車）

業なれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにあらず。

さて、冬枯の景色こそ秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人

追儺（ついな）
十二月晦日の夜宮中で疫鬼を追拂はれる

四方拜
正月元日早旦天皇が天地四方を拜し給ふ式

もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名・荷前（のさき）の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事（くじ）ども繁く、春のいそぎに取重ねて催しおこなはるゝ樣ぞいみじきや。追儺（ついな）より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして夜半（よは）過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事々しくのゝしりて足を空にまどふが、曉方（あかつき）よりさすがに音なくなりぬるこそ年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、此の頃都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそあはれなりしか。

かくて明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引替へ珍しき心地ぞする。大路（おほじ）の樣、松立て渡して、華やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。（徒然草）

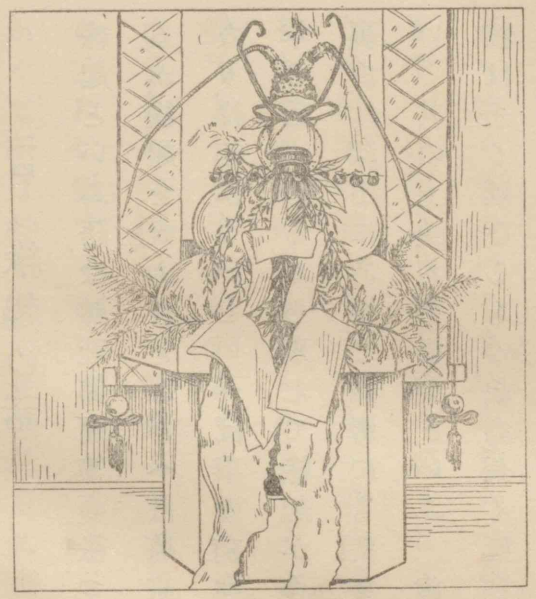
一四　緣起の話

關根正直
國文學者
前東京女子高等師範學校教授
文學博士
萬延元年（一八六〇）江戸生

例の冬も枯れず
天平八年冬十一月左大臣葛城王等賜二姓橘氏一之時御製一首橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の樹（萬葉集元正天皇）

緣起といふ語は神社佛閣等の緣（ゆかり）つて起る所即ち由來の意であるが、緣起を祝（いは）ふなどといへば將來の幸福を事の始に祝ふ意となり、緣起がよいといへば事の前兆がよいことになる。正月は年の首（はじめ）であるから別して緣起が多い。先づ、御供餅の下に敷く裏白は深山にあつて霜雪にも萎（しを）まぬ草である所が、已にめでたい。其の上漢名を齒朶といふ。齒は齡とよむ。朶は枝である。枝は永く延びるもの故、命長く延びて茂るといふ義を取つたのだと言ひ傳へる。又橙と讓葉は親子代々讓り受けて、子孫繁榮の義にとり、藪（やぶ）かうじは古名「山立花」といふ。例の冬も枯れず葉

も茂り、實をむすぶを祝ふといふ。ほんだはらは「神馬草」とかく。年德神の馬を飼ふといふ義だとも、又穂俵（ホダワラ）といふ詞の意にとつて、稻の穂の俵は豐年の祝意だともこじつけてゐる。小松の千歳を祝するはいふまでもなく、海老と野老（ところ）は、共に老の字にあやかるやうに用ひると、さも物體（モノガタリ）らしく講釋してゐるものがある。



正月の飾りもの

それから雜煮餅を食べる事に就いても、餅の異名を齒固めといつて、之を食へば齒の根が固まるといふ。齒は齡と通じ、「よはひ」

とも訓む。齡を堅める、卽ち堅固息災で長命する祝だといふ。又共に食べる物にも、それ〴〵理窟を附けて、大根は身代（家祿・資産の義）の大きに根の太く張るを祝し、菜は若菜の青きを尙んだのであらうが、後世は名も揚る（菜も食る）といふ祝、芋は位も上る（芋食る）といふ意だなどとも附會され、又鰊（カド）の子は、數の子として、子孫の繁殖、一族の繁昌を祝ひ、ごまめを御健全の義にとる類、附木のさきが硫黃なので「先祝ふ」の名詮にしたのと同じ例で、全く日本發明の緣起である。

武士の勢力を張つた鎌倉時代からは、いろ〴〵武家でも緣起を祝つた。其の一二をいへば、出陣の時祝盃をあげるのに肴（サカナ）には打蚫と堅栗と昆布とを三方臺に載せて出す。「打つて勝つてよろ昆布。」といふ詞に寄せて祝ふのである。所が勝つて歸つた凱

旋の祝には打蚫を熨斗蚫と云ひ替へる。のしは「延し」で、「勝つて威を延す。」といふ意だと言ひ傳へてゐる。食物ばかりではない。兵具調度の類にまで、名詮を尙んでゐる。例へば昔の戰に大切な武器であつた矢の羽を、鷲の石打といふ羽で作ぐ。石打は「いしくうつ。」といふ義をとつて、大將の矢と極めてゐる。又箙には多く蜻蛉の象を附けてあるが、これも蜻蛉の異名を「勝蟲」といふからである。鎧の下に着る直垂には、褐といつて、播磨の國から產する濃い藍染の布を用ひる。關東武士などは、手近い所の上總の望陀木綿でよさゝうな物を、矢張「かち」といふ詞を喜んで、着たのである。又食物の事になるが、徒然草に、鎌倉の海でとれる堅魚は、彼の邊では非常に賞翫される。同地方の老人の談に、これは近來の流行で、昔は一向賞しなかつた　それが今は上流の

人の膳にも上る樣になつたのは、妙な事だと語つた一話が出てゐる。これも恐らく鎌倉武士の間に「勝男」といふ名詮を喜ばれて、上流の士まで賞翫したのであらう。ところが兼好は都の僧であり、老人も當時流行の理由に想ひ到らずして、唯不思議に感じたのではあるまいかと思ふ。丁度德川時代に、何につけても祝に「鰹節」を用ひたのも「勝武士」と聞えるからだといふ。今も其の風は存してゐるが、意味はさつぱり分らなくなつた。又民間で祝の膳には、必ず鯛をつける。すべて魚は死つても目を閉ぢぬ。鯛の目玉は殊に大きく出てゐる。因つて之を目出鯛とこじつける。

子供の名に「長松」「鶴太郎」「お龜」「お千代」などと附ける事も、長命する樣にと望んで緣起を祝つたのであらう。男兒の祝衣に翁格子

和訓栞
八十二卷
谷川士清著
德川時代に出來た國語の辭書

奈良茂
奈良茂左衞門
江戸深川黑江町に住んだ村木商姓は神田
天保十年（一八三九）歿年三十一

を染める。翁といふ緣起である。又男女に限らず、鶴龜松竹梅をつけるのも、皆元は長壽とか幸運とかを願つて附けたのであらう。此の外末廣といふ所から、扇の模樣を染め縫ひにし、福邊といふから、瓢簞も緣起がよい。ふくべは酒を盛る器として脹瓮の義だと「和訓栞」にはある。又洒落た人などは、蕗の葉をかいて「富貴」と祝ふ例もある。昔江戸の富豪奈良茂の妻女が、服裝に華美を好んで、黑綸子に南天燭の總縫をし、其の實として珊瑚珠の五分玉を幾個となく縫ひ附けたといふ話があるが、これも矢張「難轉」の心から出て、遂にこんな豪奢な風になつた事と思はれる。是等は希望といつても消極的であるが、もつと積極的なのもある。元祿の頃の伊達風な人等が斧と琴と菊の花との模樣を衣服に染めて「善きことを聞く。」だといへば、これに反對して「鎌」の繪と「輪」の形と「ぬ」の字をかいて、そんな事にこちや「構はぬ」といつた洒落などは露骨だけれども奇拔で、いかにも元祿氣質が現れて面白い。

酉の市
酉の町ともいふ
武藏國足立郡花又村の鷲神社の祭
今は東京府内にも各所に祀る
當日熊手唐芋を賣る

又一富士二鷹三茄子の繪を衣服につけた事もある。これは駿河國の物で、德川家にとつての吉例であるとも、唯駿河國の名物を集めたのだともいふが、兎に角夢に見ると緣起がよいといつて、手拭布などにも染め出した時代があつた。故事附けかも知らぬが、富士は高大を喜び、鷹は「打ち抓み取る。」といふ義、茄子は「爲す成る。」の謎で、爲す事の成就する意に祝したのだといふ。かう聞いて見ればぢと慾張つた緣起である。いや慾張つたのでは、酉の市の熊手であらう。大鷲神社といふから、「鷲抓みに取つて、熊手で掻込む。」といふのだ。かうなつては洒落が下品で卑しく

なる。

昔豆腐に紅葉の印を附けて賣つたのは、こうえふ(買ふ樣)といふ意だとの說がある。毛拔鮨といふ鮨の名も、「能く喰ふ」といふ謎である。毛拔は兩端がよく食ひあふのでよいのだ。食ひ違つては髯が拔けぬ。毛拔鮨はお客がよくくふ鮨で、澤山賣れるといふ緣起になる。

すべて物を忌んだり、緣起を祝ふ風は、市井土民の間ばかりでない。前述の通り、公卿も武家も同樣である。足利時代の故實書に移轉の祝に赤色を禁ず。緋(火)色を避けるのである。「婚禮の席に列する者は、猿毛の馬に乘るな。猿皮の鞦(コヤ)を附けるな。」と誡めてある。又武家で男兒の祝には、「截斑(キリフ)の矢の羽を進物にするな」ともある。「切る」といふ言葉は不緣起である。それ故香の物

を三片盛らぬ、「剛の者身切」になるから。一片もわるい、「人斬れ。」になる。泰平の世に武士が人を斬り身を斬られるのは不吉である。新しく刀劍を拵へ、又は、刀身を磨がせる時は、豆腐の殼卽ち卯の花で汁を調じて祝をする。豆腐殼の異名を「きらず」といふ。「斬らず。」となるのを喜ぶのである。尙又をかしいのは、武士が祝儀の席で食事をする時「向ふ皿の肴には箸をつけても、皿に手を附けるな。」と誡める。皿に爪がのると、血といふ字になるからだ。祝儀の席に「血」の出るのは緣起がわるいといふ。何處の閑人が考へた事か、今の世にはをかしい事ばかりであるが、是皆武家に行はれた緣起である。

徳川時代に町火消の組合が「いろは四十何組」かあつた。「い組」「ろ組」と段々に分けたが、其の中で「ひ組」と「へ組」はない。火消に又ひ「火」は禁物だ。「へ組」これは緣起の方では

沙石集
十卷
僧無住著
佛教に關する雜話集
弘安六年（一二八三）成

ない、發音が尾籠に聞えるからである。これから見ると、本郷區西片町十番地に「へ の部」といふ札があるのは、甚だ以て不作法だ。それから又「四」といふ音を「死」に通ずるからといつて忌む事は古くから行はれた事で、鎌倉時代には盛んに四の字を嫌つた事が沙石集にも見えてゐる。今も電話の四十四番は賣買の値が安いといふ。四十二の親が生んだ子、また四十二の二歳兒は「しに」とも「しゝ」ともなるから、一旦捨てゝ更に拾つて育てるといふ緣起も中々古い事である。子育ての祝で尙をかしいのは、生れた子が幾人も死んだ後、又兒の生れた時は胞衣（えな）と一所に（このしろ）といふ魚を、地中に埋めると其の兒が育つといふ。鰤は「子の代」となるから、死ぬべき赤兒の身代りだといふに至つては、能くもこじつけたものだと思はれる。

又蘆は「惡し」と聞えるから、「よし」といひ替へる。梨はなし（無）になるから、反對の「あり（有）の實」といひ替へる例であるが、中古の記錄には「病苦に依つて不參」する旨を斷るのに「歡樂によつて」と書く。これもわるい詞をめでたい詞に代へていふのである。昔公卿の正服した時に持つ笏といふ物があつた。笏は音「コツ」であるのに、「しやく」と稱へた。「こつ」では「骨」と同語になるのを、緣起がわるいとしたのである。之を「しやく」と稱へるのは、昔の笏の長さは、丁度物指の樣であつたから、尺の字音を借りたのだとも、又位爵ある者の持つものだから、爵と稱へるのだとも說く人がある。又この笏を飛驒の位山の櫟（イチヒ）の木で造る。「一位」と聞える緣起を祝ふのである。横笛も字の通り「わうてき」と云つては「王敵」と同語に聞えるから、近い音を取つて「えうてう」と稱へ替へ、文字もめ

でたい字面を取つて、「永長」と記錄に書いてゐる。公卿は半ば女性的だからこんなに御幣をかつぐのかと思へば、髭むしやくしやな益荒猛夫も同じことだ。武士が戰場に於て、味方不利にして逃げる事を「延びる」といひ、又退去することを「開く」といつた。今でも「歸る」といふことを忌んで「お開きに致す。」などと、婚禮の席では言ふことになつて殘つてゐる。こんな昔の例が殘つて客商買をする家では「擂鉢」を「當り鉢」「硯箱」を「當り箱」などといつてゐる。「する」といふ詞は「磨り潰す。」などといつて、身上(家產)を滅却する意に聞えるから、當るといふ緣起の詞に替へてゐるので、古今人情に變りのない事が思はれる。

寬政の昔江戸數寄屋橋に住んでゐた武家に、誰か遺恨を含むものがあつて、或夜中、藁人形に其の武家の名を書いて、眼に大きな釘を打つて、門前に捨てた。武家の主人大いに神經を惱まして、今にも眼の潰れるやうな氣がしたが、ふと思ひついて、其の頃太田南畝は狂歌に名高く、頓智に秀で、洒落な快活な人であつたが、主人も別懇の間柄であつたのを幸ひ、此の人の狂歌で祝ひ直して貰はうと思つて、南畝の家へ出向いて、委細を談して狂歌を請うた。すると南畝が、

太田南畝
蜀山人
幕臣
雜學者
狂歌師
文政六年(一八二三)
歿
年七十五

呪ふとて眼に大釘をうつとても、
耳でなければきく筈はなし。

と祝つてくれた。喜んで此の狂歌をかいて門の外へ捨てゝおいた。處が翌晩は藁人形の耳へ釘をうつて捨てた。主人は又心配して南畝の所へ往つて訴へた。南畝は又かうよんだ。

大釘を耳へ打つたら耳つぶれ、

聾になつて猶きかぬなり。

恨んだ奴は根氣の強い男と見えて、此の後又藁人形の總體へ釘を打つて捨てた。此方もまけずに又南畝にたのんだ。そこで南畝が今度は、

身うち皆釘をうつても何のきかう、
糠に緣ある藁人形ぢや。

此の後は遂に藁人形を捨てなかつたといふ。（史話俗談）

回 一五 物の初

幸田露伴

幸田露伴 文學者 文學博士 慶應二年（一八六七） 江戸生

よろづのもの、初こそは美はしく面白けれ。混沌わづかに剖れて天地漸く成りし時は、如何ばかり目ざましう心よかりけん。

それは見ねば知らず。まづ年の首の朝ぼらけ、大路に幕目の浪清くして千門に旗の日の紅飜るすがすがしさ。行きかふ人々の面の色も若々しう、悔恨を昨夜の關の彼方に捨てゝ、希望を此の曉の風の息吹に蘇らせ、今歳はと勇める眼の中の勢もたのもしや。雲の扉裂けて金光迸り騰り、紅盤焰旋りて瑪瑙爛るゝ太陽のさし昇りたる、日の出づる初の景色は、春といはず冬といはず爽かなり。

樹影沈んで夕の水潤く、暮靄地に這ひて人の語靜まる時、白玉潤を含んで大いなること車輪の如き月の、薄縹の天にそつと出でたる、其の初の涼しき心地は、之を何にか譬へん。

潮の初も亦面白し。濱の沙固うして礫やゝ乾き、汐木小白みて寄藻香を放つ、干潮の極みに、沖の方漸く膨れて、さし潮の風に乗

り來り、一分々々に沙を蝕ひ、礫を呑み、潮泡渚に搖ぎて豆蟹勇み奔り、海鷗天に舞ひて時に濤の頭に下り、寄藻・汐木のぬれ〳〵て動かんとする折、邊波にまろぶ貝殼も艶やかに、磯石未だものいはず、濤猶怒らねど、やがては澎湃鞳鞳の響震天撼地の勢をなして、龍王が無字の大經卷を卷いて、又舒べて、千古萬古人間に其の讀まんことを逼る日々の凄じき業を繰返さんとする意を示せる、何ともえ言はず壯なり」。

天に挺んでては白雲を駐め、日を蔽うては山逕を青むる喬樹の、其の初、杉も檜もひよろ〳〵として、松も欅もなよやかなるをかしさ。雨の膏には怡悅の目を張りて笑み、風の笞には悲哀の聲を濕ませて戰けど、其の中に不屈の意氣を保ちて雪虐ぐれども偃して復起き、霜辱むれども萎けて再び振ひ、日の父の光を慕ふ

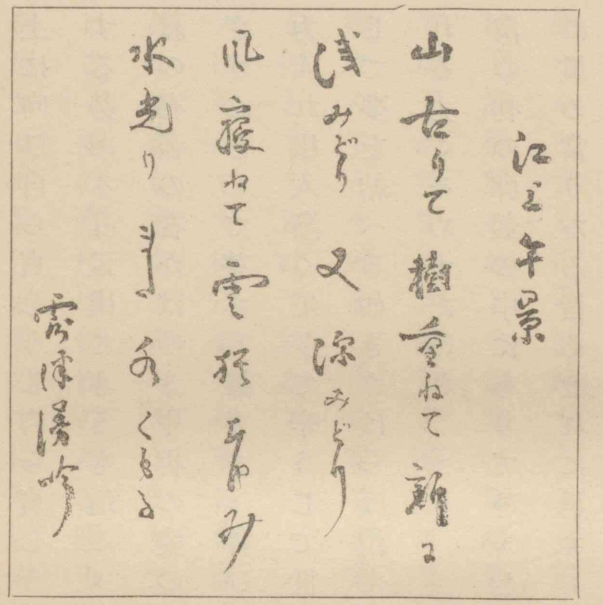
孝子の情誠に、月の母の露に甘ゆる少女の思やさしく、上に向ひ上に向ひ、自ら貞しうし自ら貞しうして終に其の生を遂げんとする勢ある、孔孟出でざるも道こゝに啓かれたりといふべし。

萩の初、菘の初、かはゆき甲拆の姿のしをらしや。地壓すれば芽ざさんとして芽ざし難きまゝ、伸びんとして屯り、身を屈めて一力入れ、根入漸く足りて辛うじて世に出でたる、嫩青微綠、柔かにして夢を結べる如き、さはらば消えんおぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ。

禽の初の卵殼の中にありてひゝと鳴きたる、啐啄事了りて綿毛に風の當りたる、皆あはれに勇まし。彼の聲には嚶竹裂けんとし、石破れんとする韻を藏し、此の姿には鐵翮颯を截りて崑崙を凌ぐ威を具ふ。

嚶竹　崑崙山の北にある嚶谷から出る竹　笛を作るに適すといふ

江上午景
山古りて樹重ねて新に淺みどり
又深みどり風寢ねて雲猶あゆみ
水光りまた水くもる
露伴漫吟



幸田露伴筆蹟

魚は苗にして江湖に遊ばんとし、蛇は寸にして藪澤に傲る。仔駒の生れて眼の色さへ定かならぬに、四蹄早くも輕く草の煙を蹴て母馬に追附き、其の乳を立飲したる、あどなくして而も至健の德を表す。獅子の兒の、怒毛もまだ硬からぬに千尺の崖より墜されて、巉巖の下に膽を張り爪を張りたる、流石に仰いで親の姿の霞に遠きを見ては兒心の遺瀨なき思もすらんを、獸王の血統とて女々しからぬも尊し。

萬の物を觀るに、其の初皆美はしく好し。人の子の生るゝや惡相なしと聞く。物皆始有り、願ふ所は其の始有る所以を遂げんことなるのみ。（洗心錄）

一六　賀茂眞淵

伴蒿蹊
名は資芳
國學者
文化三年（一八〇六）
歿
年七十四

春滿
山城伏見稻荷山の祠官
國學者
元文元年（一七三六）
卒
年六十九

在滿
春滿の甥
國學者
寶曆元年（一七五一）
卒
年四十六

眞淵は姓賀茂、縣主、岡部衞士と名のる。遠州濱松の人。春滿に從ひ、家僕のごとくして京都に學ぶこと年あり。學成りて江戸に下り、大いに古學を唱ふ。春滿は萬葉の解に功ありといへども、歌はその風をよまず。在滿は「萬葉の比は文華（ムナキヤガラモン）いまだ開けず、歌の盛は新古今集の時なり。」といへり。眞淵に及びてはじめて

萬葉
二十卷
上古の歌を集めたもの

新古今集
二十卷
藤原定家家隆等の撰んだ歌集

契沖
國學者
萬葉集代匠記を著す
元祿十四年（一三六一）歿
年六十二

大人
奉滿を指す

南郭服部氏
名は元喬
徂來の門人
古文辭家
寶曆九年（一四一九）歿
年七十七

萬葉の風をよみうつし、文章も亦古言をもて綴り、一家を成し、世の耳目を驚かす。從ひ學ぶもの多し。

「その説に、『契沖は新墾しつれど、未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎしこそ惜しけれ』。大人は歌のみかは、舊りぬるちゞの書どもをあらすきかへしゝいたづきのかひ、さはなれども、まだ刈りをさめ果てざるに病に臥しつ。」などいひて、おのれ是がなりはひを遂ぐるよしなり。」實に古

賀茂眞淵像（竹柏園藏）

を發揮して後生を誘ふ功少ならず。其の證をいはゞ、或時南郭服部氏を訪ひて物語らふついで「唐詩の風韻衰へて六朝に及ば

六朝
支那の漢と唐との間の朝

吳
晉
宋
齊
梁
陳

汾上驚秋
唐の竇鞏の詩
唐詩選にある

ぬは『汾上驚秋』の詩にて知りぬ」といふ。南郭「いかに」と問ふ。「さればよ、『北風吹白雲、萬里度河汾。』といへる起承の句、誠に羈旅の秋情いはん方なきに、『心緒逢搖落、秋聲不可聞。』の轉合の句、上の意を注せしに、氣格の落ちたるを覺ゆ。吾が邦の歌も、後世のさま劣り行くは、唯此の如し。」といへば、南郭も大いに感服せりとなり。

又山部赤人の歌、

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ、
富士の高嶺に雪はふりける。

といふを注して、「田子の浦より磯傳ひに薩埵の山陰を打出でて見れば、富士の高嶺の雪眞白に天外に秀でたるを、こはいかでと見て感じたるさまなり。何ともいはで有りのまゝに述べたるに、其の時、その地、其の情、おのづから備ること、古の妙なるものな

悠然　採二菊東籬下一、悠然見二南山一。（陶淵明）

世の儒士　荻生徂來など

り。赤人は短歌の神なること此の一首にても知らる。」と解きて、細註に『悠然見南山』といふも相似たりといふ人侍れど、かれはその處にての事、是はふと山陰より立出でて見出したるなれば、其の義異なり。又悠然としてとは、みづからの心を注せるに似たれば、猶作れるものなり。此の歌は唯有りのまゝなるが似る者なきなり。」など論ずる所、深くその旨を得たりといふべし。されども何につけても大成を任とせる故に物事に疑を闕かず、強解もまたまゝ見ゆるにや。「又唐國のことを仇のごといひて、孔子をさへ議することあり。是は世の儒士自ら夷と稱し、此の國の非を數へて唐土に生れぬを憾むるごときを憤れるなるべし。これ固よりその罪いふべからず。皇神の御惠に漏れたる國の蠹なり。」されどもまた眞淵も甚だしといふべし。譬へば病を

歳七十有餘
明和六年（一七六九）
歿
年七十三

宇萬伎
加藤五郎左衛門
美樹
國學者
安永六年（一七七七）
歿
年五十三或はい
ふ五十七

藥せんに、こゝになきものはかしこに求めんに何の忌むことかあらん。たゞ病の平らぐをせんとすべきのみ。こは心せばきがゆゑか。

生涯國學を任として江戸に終る。歳七十有餘とぞ。その詠み出でたる歌、門人宇萬伎が記しおけるうち、少し書き出す。

春の日山を望むといふ題を

見渡せば天のかぐ山うねび山
あらそひたてる春霞かも。

その住居を縣居と名づけゝる處にて、長月十三夜によめる。

秋の夜のほがら〳〵と天の原
照る月影に雁鳴きわたる。

須賀　信濃國下伊那郡下條村のあたり

神無月ばかり嵐を
科野なる須賀の荒野に飛ぶ鷲の
翼もたわに吹く嵐かな。

又若きほどの歌とて、別に朱をもて宇萬伎が書添へし中、

鳴子ひく門田の稲のほどもなく
立ちてはかへるむら雀かな。

宇萬伎いふ「これら姿も詞もよろしきものから、こゝろがしこきに過ぎていと後の世のさましたり。中さだには詞も姿も唯あがれる世のさまにのみ詠みうつされし多かりしを、やゝ老に至りてかゝるさまに（前の歌どもをさす）のみ詠み出でられしはいと高しとも高し。世に聞き知る人はありや、なしや。」

蒿蹊いふ「此の老の後のはおのれも聞き知る人の數に入るべし。又若きほどのは後の世のさまなれば歌主の後の意にはかなはざらめど、其の才のたけたるを覺ゆ。かゝればこそ一家の學をも唱へ出しけれ。」（近世畸人傳）

一七　春の心

賀茂真淵

うらうらとはるさき春のこゝろより
にほひぞそめる山ざくらばな

桔梗が原
信濃國東筑摩郡洗馬附近の原
武田信玄と小笠原長時とが合戰した處

小澤蘆庵
京都の歌人
享和元年（一八〇一）歿
年七十九

加藤千蔭
江戸の國學者
文化五年（一八〇八）歿
年七十四

村田春海
江戸の國學者
文化八年（一八一一）歿
年六十六

もゝちゝの学むすばね平ゐりて
あさ風さむきちゝの原　加藤千方伎

たかゐのは月と花とれたぼろ夜と
ひとり寝あはなるこのおとゝふ　小澤蘆庵

まみぶがはこのきてゝぶかいうだこ
かすむあしの面をゝそれ　加藤千蔭

村田春海

木下幸文
京都の歌人
文政五年（一八二二）歿
年四十三

香川景樹
京都の歌人
天保十四年（一八四三）歿
年七十四

加納諸平
和歌山の歌人
安政四年（一八五七）歿
年五十二

心あてゝみしたゝ雲はふもとゝて
たもはゐそゝ晴てふじのね　木下幸文

ゆさてゝむこれれ花ある寺れゝむ
れ原ぐしゝかねきゝなり　香川景樹

ゆ雪よりこゝろうちいれむ佐保ゞはの
さゞれまゝうゝるーら茅はそれ　加納諸平

雲かゝるわゝあゝにあゝーほを

中島廣足
熊本の國學者
元治元年（一八六四）
歿
七十三

橘曙覽
福井の歌人
明治元年歿
年五十七

本居宣長
國學者
通稱中衛
鈴屋と號す
伊勢松阪生
享和元年（一八〇一）
歿
年七十二

面ふらせてくだちうがづり　中島廣足

ことばのをぢあくるうちすゆらすゆばるの
をそれもひるきちるれり　橘曙覽

はねならす峰あるこっまみれさるる
よどとうづてさくさうびいろる

一八　師の說になづまず

本居宣長

おのれ古典（いにしへぶみ）をとくに、師の說とたがへること多く、師の說のわろき事あるをばわきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことゝ思ふ人おほかめれど、これすなはちわが師の心にて、つねにをしへられしは、「後によき考の出できたらんには、かならずしも師の說に違ふとて、なはゞかりそ。」となん、教へられし。こはいとたふとき教にて、わが師の、よにすぐれ給へる一つなり。おほかた古をかむがふる事、さらにひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくもあらず。又よき人の說ならんからに、多くの中には、誤もなどかなからん。必ずわろき事もま

本居宣長（本居清造藏）

じらでは、えあらず。そのおのが心には、今はいにしへのこゝろ、ことゞく明らかなり、これをおきては、あるべくもあらずと思ひ定めたることも、思の外に、又人のことなるよき考もいでくるわざなり。あまたの手を經るまに〳〵、さきゞの考のうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎ〳〵に、くはしくなりもてゆくわざなれば、師の說なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道にはいふかひなきわざなり。又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いとも畏くはあれど、それもいはざれば、世の學者その說に惑ひて、長くよきをしる期なし。師の說なりとて、わろきを知りながらいはず、つゝみかくして、よきさまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。

宣長は道をたふとみ古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古の意のあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけんことをば、えしもかへりみざることあるを、なほわろしとそしらん人はそしりてよ。そはせんかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならんとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや。そはいかにもあれ。（玉勝間）

吉村冬彥
本名は寺田寅彥
物理學者
理學博士
東京帝國大學教授
明治九年高知縣高知生

一九　淺草紙

吉村冬彥

十二月初めの或日、珍しくよく晴れて、そして風のちつともない

午前に、私は病床から這出して縁側で日向ぼつこをして居た。都會ではめつたに見られぬ強烈な日光がぢかに顔に照りつけるのが少し痛い程であつた。そこに乾してある蒲團からはぽかぽかと暖い陽炎が立つて居るやうであつた。濕つた庭の土からは、かすかに白い霧が立つて、それが僅かな氣紛れな風の戰ぎにあふられて小さな渦を卷いたりして居た。子供等は皆學校へ往つて居るし、他の家族も何處で何をして居るのか少しの音もしなかつた。實に靜かな穩かな朝であつた。

私は無我無心でぼんやりして居た。唯身體中の毛穴から暖い日光を吸込んで、それがこのしなびた肉體の中に滲込んで行くやうな心持をかすかに自覺して居るだけであつた。

ふと氣がついて見ると、私のすぐ眼前の縁側の端に一枚の淺草紙が落ちて居る。それはまだ新しい、ちつとも汚れて居ないのであつた。私は殆ど無意識にそれを取上げて見て居る內に、其の紙の上に現れて居る色々の斑點が眼に附き出した。

紙の色は鈍い鼠色で、丁度子供等の手工に使ふ粘土のやうな色をして居る。片側は滑かであるが、裏側は隨分ざら〳〵して荒筵のやうな縞目が目立つて見える。併し日光に透して見るとこれとは又別な、もつと細かく規則正しい簾のやうな縞目が見える。此の縞は多分紙を漉く時に纖維を沈着させる簾の痕跡であらうが、裏側の荒い縞は何だか分らなかつた。

指頭大の穴が三つばかり明いて、其の周圍から喰み出した纖維が其の穴を塞がうとして手を延ばして居た。

そんな事はどうでもよいが、私の眼についたのは、此の灰色の四

十平方寸ばかりの面積の上に、不規則に散在して居るさま〴〵の斑點であつた。

先づ一番に氣の附くのは赤や青や紫や美しい色彩を帶びた斑點である。大きいのでせい〳〵二三分四方、小さいのは蟲眼鏡でゝも見なければならないやうな色紙の片が漉込まれて居るのである。それが唯一樣な色紙ではなくて、よく見ると其の上には色々の規則正しい模樣や縞や點線が現れて居る。よくよく見て居ると、其の中の或物は狀袋のたばを束ねてある帶紙らしかつた。又或物は卷烟草の朝日の包紙の一片らしかつた。マッチのペーパーや廣告の散らし紙や、女の子のおもちやにするおすべ紙や、あらゆるさう云つた色刷のどれかを想ひ出させるやうな片々が見出されて來た。微細な斷片が想像の力で補

充されて頭のなかにはいろ〳〵な大きな色彩の模樣があらはれて來た。

普通の白地に黑インキで印刷した文字もあつた。大概やつと一字、せい〳〵で二字位しか讀めない。それを拾つて讀んで見ると、例へば「一同」「圓」などはいゝが「盪」などといふ妙な文字も現はれて居る。それが何かの意味の深い謎でゝもあるやうな氣がするのであつた。「蛉かな」といふ新聞の俳句欄の一片らしいのが見附かつた時は少しをかしくなつて來て、つい獨りで笑つた。

紙片の外にまださま〴〵の物の破片がくつついて居た。木綿絲の結び玉や、毛髮や、動物の毛らしいものや、ボール紙のかけらや、鉛筆の削り屑、マッチ箱の破片、こんなものは容易に認められるが、中にはどうしても來歷の分らない不思議な物件の斷片が

あつた。それから或植物の枯れた外皮と思はれるのがあつて、其の植物が何だといふことがどうしても思ひ出せなかつたりした。

此等の小片は動植物界のものばかりでなく鑛物界からのものもあつた。斜に日光にすかして見ると、雲母の小片が銀色の鱗のやうにきら〳〵光つて居た。

段々見て行く中に此の澤山な物のかけらの歴史が可なりに面白いものゝやうに思はれて來た。何の關係もない色々の工場で製造された種々の物品が、さま〴〵の道を通つて或家の紙屑籠で一度集合した後に、又他の家から來た屑と混合して製紙場の槽から流れ出す迄の徑路に、どれ程の複雑な世相が纏綿(テンメン)して居たか。かう一枚の淺草紙になつてしまつた今では、再びそれ

エマーソン
Emerson (1803—1882) 米國の思想家詩人

シェークスピア
Shakespeare (1564—1616) 英國の大戯曲家詩人

モンテーニュ
Montaigne (1533—1592) 佛國の思想家

をたどつて見るやうはなかつた。私は唯漠然と日常の世界に張渡された因果の網目の限もない複雑さを思ひ浮べるに過ぎなかつた。

あらゆる方面から來る材料が一つの釜で混ぜられ、こなされて、それから又新しい一つのものが生れるといふ過程は、人間の精神界の製作品にもそれに類似した過程のある事を聯想させない譯にはゆかなかつた。

そのやうな聯想から、私はふとエマーソンが「シェークスピア論」の冒頭に書いてある言葉を思ひ出した。「價値のある獨創(オリヂナリティ)は他人に似ないといふ事ではない。」「最大の天才は最も負債の多い人である。」こんな意味の言葉が思ひ出された。

それから又或盲目の學者がモンテーニュの研究をする爲に採

つた綿密な調査の方法を思ひ出した。モンテーニュの論文を悉く點字に寫し取つた中から、あらゆる思想や、警句や、特徴や、挿話を書き拔き、分類し、整理した後に、更に此の著者が讀んだだらうと思はれるあらゆる書物を讀んだり、讀んで貫つたりして、其の中に見出される典據や類型を拾ひ出すといふのである。

此の盲人の根氣と熱心に感心すると同時に、其の仕事が何處となく、私が同紙面の斑點を搜しては其の出所を詮索した事に似通つて居るやうな氣もした。どんな偉大な作家の傑作でも、寧ろさういふ人の作ほど、豐富な文獻上の材料が混入して居るのは當然な事であつた。それを穿鑿（センサク）するのは興味もあり有益な事でもあるが、それは作と作家との價値を否定する材料にはならなかつた。要は資料がどれだけよくこなされて居るか、不淨なものがどれだけ洗はれて居るかにあつた。

魔術師でないかぎり、何もない眞空から假令一片の淺草紙でも創造する事は出來さうに思はれない。しかし紙の材料をもつと精選し、もつとよくこなし、もう一層よく洗濯して、純白な平滑な、光澤があつて堅實な紙に仕上げる事は出來る筈である。マッチのペーパや活字の斷片が其のまゝ眼につく內は、まだ改良の餘地はある。（冬彥集）

三〇　繪馬

響庭篁村

神社佛閣に繪馬を奉ること、其の昔は眞の馬を牽き獻げしなるを、後に繪に畫きて奉納したるに、繪馬と字の如く馬の繪に限り

響庭篁村
名は與三郎
小說家
安政二年江戶生
大正十一年歿
年六十八

たるならんが、其の繪馬より思ひ付きて、さま〳〵の繪をも畫きて堂社へ奉納し、信仰奉謝の意を表はしたることはなか〳〵に古く、太平記の阿保・秋山河原軍の條に、「されば其の頃靈佛靈社の御手向、扇・團扇のばさら繪にも、阿保繪秋山が河原軍とて書かせぬ人はなし。」とあり。此の御手向とあるは繪馬の額の類をさしたるなり。阿保・秋山の河原軍は正平年中の事なれど、「されば其の頃」とさしたるは直に其の年中の事ならず、太平記の作者の頃とするも、足利中世の事なるべし。其の頃より既に靈佛靈社に名高き武勇の事などを書きて奉納せし事盛なりとせば、繪馬の額には雪舟・雪村の名畫もありしか知るべからず。されど燒亡に罹り、風雨に曝されて、京都清水寺の繪馬の額にも、天正以前のはなしといふ。

阿保・秋山　後村上天皇正平六年(一三五一)正月高師直の臣阿保肥前守忠實が桃井直常の臣秋山新藏人光政と河原に戰つたこと太平記に出てゐる

ばさら繪　粗筆にかいた風俗畫のやうなもの

雪舟　畫僧、備中國赤濱の人　寛正六年明に航す文明元年歸朝永正三年(一五〇六)寂　年八十七

雪村　畫僧名は周繼　周文雪舟の筆意を學びて一家を成す　元龜頃まで在世

淺草觀世音堂　東京淺草淺草寺の本堂

清水寺　京都東山清水坂の上にある眞言宗の寺　觀世音堂が名高い

古法眼元信　狩野正信の長子　周文及び小栗宗舟の門人　足利義澄に仕ふ　永祿二年(一五五九)歿　年八十四

繪馬の名畫と云へば、古法眼元信の馬(淺草觀世音堂と、清水寺にあり。共に靈ある昔話を傳へたり。)と先づ謂はれて、名畫名筆の名あるものはそれ以後のもの多し。

京都清水觀音草摺引額

此の繪馬の額を堂社の寶前に掛け奉る趣意は、前にいふ如く、信仰者が祈願奉謝の爲なれど、後には畫工が一世に名を振ひ、末代に蹟を留むる名譽の展覽會の如くなり、其の畫に精神を注ぐこと尋常ならざりき。元來繪馬は諸國の人の集り來りて見るものなり。一筆一畫の粗誤あ

長谷川久藏　雪舟派の畫家
草摺引　曾我物語に出てゐる話
天正二十年（一五九二）文祿元年で秀吉が朝鮮征伐を始めた年
猪熊　京都の大宮通の東の通
西鶴　井原西鶴　大阪の人　俳人　小說家　元祿六年（一六九三）歿　年五十三
繪難坊　古今著聞集に出てゐるやかましい繪畫批評家
延享三年（一七四六）櫻町天皇の御宇將軍家重の時
服部梅信　浮世繪師

りても、直に指摘せられて而も其の過を改め難し。京都淸水寺に最も古しと傳へらるゝ長谷川久藏信春の時致、朝比奈草摺引の圖は、天正廿壬辰卯月十七日の日附ありて、其の勇壯の樣は見る人腮を振つて感嘆したるが、或時猪熊の染物屋の下女が朝比奈の袴の襞の折れたる上にもかまはず、舞鶴の紋を書きたるを見出し、折目も皺もなき繪なりと笑ひしより、都中取沙汰になりしを信春聞きて、一生此の事を苦に煩ひたりといふこと、西鶴の織留に出でたり。斯くの如く繪馬は萬人の見る所、いづれいづこに如何なる繪難坊あるかも知るべからず。繪馬の額を書きて堂社に掲ぐる事は、其の頃の繪師の死活問題ともいふべきほどの大事なりしなり。

同じ御寺に延享三年に服部梅信といふ畫士同じく、草摺引の額を掲ぐ。是亦朝比奈が鶴の丸の紋を襞も折目も構はず書きこなしたり。或人難じて、「天正の信春舞鶴を襞に拘はらず書きて、一生の悔を殘したり。同じ堂に同じ圖柄を書きて、其の過を貳たびする事如何にぞや。」と云ひしに、梅信傍を向きて、「是は掛額を描く畫家の法なり。」とのみにて取合はざりきとぞ。信春は古法眼の弟子にして、其の筆法を得たりと稱せられ、舞鶴の非難を氣病みにして終りきと雖も、其の額は名畫として今に尊重せられ、掛額を描く

東京淺草觀音鶴退治額

嵩谷
畫家
姓は高名は雄
文化元年(一八〇四)
歿
年七十五

猪早太
源三位頼政の郎
等

王子稲荷神社
東京市外飛鳥山
の西北方にある

柴田是眞
畫家で蒔繪師
通稱順藏
江戸の人
明治二十四年歿
年八十五

芳年
月岡芳年
東京の浮世畫師
明治二十五年歿
年五十四

法を得たりと自ら安んじたる服部梅信は、其の畫系すら定かならずして、見る人之を妙とせず。其の得失は知るべきならずや。

淺草觀音に掲ぐる嵩谷の鵜の額も、初め猪早太は小刀を逆手に持ち居たりしを、或人注意して「平家物語の本文にも、落つるところを猪早太取つて押へ、柄も拳も通れと九刀ぞ刺したりける。」とあれば、刀をば順に持ちて刺す樣にありたし。」と云ひしに、嵩谷悅びて、一旦掛けたるを引下して、今の如く書直して名譽を殘したり。

王子稲荷神社の額堂の名畫、柴田是眞翁筆の鬼女圖は天保十一年是眞二十四歳の作にして、また一代作品中の秀逸なるものなり。是眞自身も晩年幾度か此の圖を試みたれどまた此の如く會心のものを作る能はざりきといふ。予輩また故芳年氏に聞

國華
繪畫彫刻等の雜誌

瀧文學士
瀧精一
繪畫史家
畫家瀧和亭の子
東京帝國大學教授
文學博士

ける事あり。氏は此の是眞の額を欽慕して、時々王子稲荷に詣りてこれを眺め、密かにその圖を作りたることあれども、遠く及ばず、筆を抛ちて歎息したる事數度なりといへり。名工名工を知るといふべし。此の繪の「國華」に出でし時、瀧文學士に對し、「是眞二十四歳の作とする事は裏書の年號及び社傳によりて確實なるべきが、後年いかに大家と崇められたりとは云へ、未だ二十四歳の若輩にして此の大題を揮毫せんこと、自ら名の爲にしたりとしても

東京府王子稲荷社鬼女額

瀧野川　王子の近くにある紅葉の名所

餘りに大膽なり。また祈願主ありて依頼したりとしても、二十四歳の此の時の是眞に、此の桐柾目金箔置の大額に筆を着けさせんこと如何あるべきか。」と問ひたるに、「さればなり、是眞に伯父あり。そは有力なる大工棟梁にて、王子稲荷の今の社を建てたれば、其の記念ともして、若き甥に此の大畫を託せしならん。是眞も我が技倆を一世に紹介せんと、伯父の慈愛に感じて、畢生の力を籠めしものならん。」と答へられぬ。謂はれを聞けば名畫の趣味も一段と添ふ心ちす。瀧野川の紅葉狩に鬼女といへば緣あり。これは渡邊の綱に切られし腕を取かへす鬼女の額なり。散策のついでなどに立寄りて見れば、景色にまさる趣あるべし。二十四歳にして此の名畫あり。書畫文藝といはず、諸道にたづさはる者悚然として怖るゝところあるべきか。そは鬼女の勢の凄じき外に、自ら奮勵感憤するところあるが故なるべし。繪馬は昔の畫工の大展覽會なり、繪馬には畫工畢生の榮辱のかゝるものなり。見るに心あるべきものと謂ふべし。（雀躍）

鵯越　神戸市北方の山徑
鷲尾　三郎經春
一谷　神戸市の西にある谷　又その西方に二ノ谷三ノ谷がある

二　鵯越

九郎義經は鷲尾を先陣として、一谷の後鵯越へぞ向ひける。頃は二月の初めなり、霞の衣たちへだて、綠を添ふる山の端に、白雲絶えゝ〳〵聳えつゝ、先づ咲く花かとあやまたる。未だ歩みなれぬ山路なり、行末はそこと知らねど、征く馬の足に任せつゝ、各先にと進みけり。まだ仄暗き程なり、道には泥みけれども、矢合せ時を定めたれば、明くるを待つに及ばずして、谷に下り峯に登り、

辰の半　午前九時ごろ

劫火　佛教の語　世界の破滅する時起る大火災

引懸け〳〵打ちけるに一谷の後に篠が谷と云ふ所に人の音しければ、押寄せて「何者ぞ。」と問ふ。名乘ることはなくて散々に射ければ「此奴原は平家の雜兵にこそあるらめ、一々に搦め捕つて頸を切り、軍神に祭れ。」とて源氏も散々に射ければ、此處にて平家多く討たれにけり。

其の後鷲尾尋承にて下り上り打つ程に、辰の半に鵯越、一谷の上、鉢伏、磯の途と云ふ所に打登る。兵ども遙かにさしのぞきて谷を見れば、軍陣には楯を並べ突き、士卒は矢束をくつろげたり。前は海、後は山、波も嵐も音合せ、左は須磨、右は明石、月の光も優ならん。追手の軍はなかばと見えたり。喚き叫ぶ聲、射違ふ鏑の音、山を穿ち谷を響かし、赤旗・赤符立て並べて、春風に靡く有樣は、劫火の地を燒くらんもかくやと覺えたり。

佐藤三郎兵衛　名は繼信　義經四天王の一人　屋島で討死

白覆輪　刀の鞘鞍等の緣を金銀などで覆ひ飾るを覆輪といふ　白覆輪は銀黃覆輪は金で

時既によくなりたり。大手に力を合せんとて見下せば、實に上七八段は小石交りの白砂なり。馬の足とゞまるべき樣なし。徒歩にても馬にても落すべき處に非ず。さればとて、さてあるべき事ならねば、只今まで乘りたりける大鹿毛には、佐藤三郎兵衛を乘せ、我が身は大夫と云ふ馬に乘替へて、谷へ打向け給ひ、「鹿の通路は馬の馬場ぞ。各〻落せ〳〵。」と勸め給ふ。兵ども我も〳〵と馬をば谷へ引向けて、心は先陣とはやれども、流石いぶせき磯なれば、手綱を控へてためらへば、馬も恐れて退きけり。互に顏と顏とを見合せて、何處を落すべしとも見えず。軍將宣ひけるは、「一つは馬の落樣をも見、一つは源平の占形なるべし。」とて、葦毛の馬に白覆輪、白ければ白旗に準へて源氏とし、鹿毛の馬に黃覆輪、赤ければ赤旗に準へて平氏とて追下す。各〻木間にて是を見

越中前司盛俊
盛國の子
一谷で戰死

る。上七八段は小石交の白砂なれば、轉ぶともなく落つるともなく下りつゝ巖の上にぞ落著きたる。稍暫くあつて、岩の上より轉び下り、越中前司盛俊が假屋の後に落付きて、源氏の馬は這起きつゝ、身振ひして峰の方を守り、二聲嘶え、篠草食みて立つたり。平家の馬は身を打損じ、臥して再び起きざりけり。城中には是を見て、「敵のよすればこそ鞍置馬は下るらめ。」とて騷ぎ迷ひける處に、御曹司は、「源氏の占形こそめでたけれ、平家の軍、樣あるべし、人だに心得て落すならば、過ち更にあるまじ、落せ落せ。」とのたまへども、我だに恐れて落さねば、人も恐れてえ落さず。白旗五十流ばかり梢に打立てゝ宣ひけるは「守つて時を移すべきに非ず。磯を落すには手綱あまたあり。馬に乘るには、一に心、二に手綱、三に鞭、四に鐙と云ひて四つの義あれども、所詮心をもちて乘るものぞ。若き殿原は見も習へ、乘りも習へ、義經が馬の立て樣を本にせよ。」とて眞逆に引向け、「續け〳〵。」と下知しつゝ、馬の尻足引敷かせて、流れ落しに下したり。三千餘騎の兵ども、大將軍に續けとて、白旗三十流、城の內へ指覆ひ、轡並べて手綱かいくり、同じ樣に尻足しかせて、さと落して、壇の上にぞ落留る。それより底をさしのぞいて見れば、石巖峙つて苔むせり。刀の刃に草覆へる樣なれば、いといぶせき上、十・二十丈もやあるらんと見え渡る。下へ落すべき樣もなし、上へ上るべき便もなし。互に堅唾を呑みて思ひ煩へる處に、三浦黨に佐原十郎義連進み出でて、「我等甲斐・信濃へ越えて狩し鷹使ふ時は兎一つ起いても鳥一つ立てゝも、傍輩に見落されじと思ふには、是に劣る處やある。義連仕らん。」とて手綱搔繰り鐙踏張り、只一騎眞先蒐けて落

す。御曹司是を見給ひて、「義連討たすな、つゞけ者ども〳〵。」と下知して、我が身もつゞきて落されけり。

佐原義連鵯越を下る（前賢故實）

畠山は赤威の鎧に護田鳥毛の矢負ひ、三日月と云ふ栗毛馬の太く逞しきに乘つたりけり。此の馬鞭打に三日の月程なる月影のありければ名を得たり。壇の上にて馬より下り、さしのぞいて申しけるは、「こゝは大事の惡所、馬轉ばしては惡しかるべし。『親にかゝる時子にかかる折』と云ふ事あり、今日は馬を勞らん。」とて、手綱・腹帶緩り合せて、七寸に餘りて大きに太き馬を十文字に引きからげて、鎧の上に搔負うて、椎の木のすだち一本捩切り杖につき、岩の迫をしづしづとこそ下りけれ。東八箇國に大力とは云ひけれども、只今かゝる振舞人倫にはあらず、まことに鬼神の所爲とぞ、上下舌を振ひける。げに「此の岩石に馬を損じては不便なり、日比は汝にかゝりき、今日は汝を孚まん。」と云ひける、情深しと覺えたり。其の後三千餘騎、手綱かいくり鐙蹈張り、手をにぎり目を塞ぎ、馬に任せ人に隨つて、劣らじ〳〵と落しけるに、然るべき八幡大菩薩の御計らひにやと申しながら、馬も人も損ぜざりけるこそ不思議なれ。

落しもはてず、白旗三十流さと捧げ、三千餘騎同時に鬨を造る。山彦答へて夥し。平家の城郭に亂れ入りて竪ざま横ざま、蜘蛛

手十文字に馳廻り、喚き叫んで戰ひければ、城中には東西の城戸口ばかりこそ防ぎけれ、さしも恐しき巖石より、敵寄すべしとも思はざりければ、打延べて、「左右の城戸口の弱からん時軍せん。」とて、鎧物具脱ぎ置きて、小具足ばかりにて居たる所へ、はと寄せ、どつと鬨を作りたれば、弓矢を取り馬に乘る隙を失ひ、周章迷ひ、御方の兵も皆敵に見えければ、適〻馬に乘り弓矢を番ひける者も、御方討に討殺され切殺されて、上になり下になつて、肝も心も身にそはず、度を失ひ騒ぎふためきける有樣は、少魚のたまり水に集り、宿鳥の枝を爭ふに異ならず。

御曹司下知し給ひけるは、「城郭曠博なり、賊徒數を知らず、多く官軍を亡さんこと、最も不便なり。火を放て。」とのたまへば、武藏坊辨慶、屋形に打入り、假屋に火をさす。折節西の風烈しくして、猛

小具足　小手脇當脇楯だけ着けたこと

火城の上へ吹覆ふ。平家の軍兵煙に咽び火に責められて、今は敵を防ぐに及ばず、取るものも取敢へず、濱の汀に逃出でつゝ、海の藻鹽に馳入つて、船に乘らんとぞ迷ひける。助舟も多くありけれども、そも然るべき人々をこそ乘せけれ、次々の者共をば乘せざりければ、乘らん乘せじとする程に、多く海にぞ沈みける。猛火の煙、蹴立の灰、逃去る道も見えざりければ、皆敵にぞ討たれける。されば助るは希に、亡ぶるは多し。無慙と云ふも疎なり。

（源平盛衰記）

さる程に　安德天皇壽永四年（一八四）二月十八日源義經がわづか百五十騎を率ゐて阿波から急に讃岐の屋島へ押寄せて來た

三　扇の的

さる程に、阿波・讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯、こゝの洞より十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せき

判官　検非違使尉源義經
柳　表白裏青
せがい　船棚
手だれ　上手

たる程に、判官程なく三百騎になりたまひぬ。「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず。」とて源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。「あれは如何に。」と見るところに、船の中より年の齢十八九許なる女房の柳の五衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挾みたて、陸へ向つてぞ招きける。

判官後藤兵衛實基を召して、「あれは如何に。」とのたまへば、「射よとにこそ候らめ。たゞし大將軍の、矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。」とまをしければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへば、「手だれども多く候なかに下野の國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ小兵にては候へども、手はきいて候。」と申す。判官「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などを爭ひて三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

はたそで　袖一幅半のうち袖口の方半幅
足白の太刀　緒をとほす金具を銀でつくつた太刀
ぬための鏑　鹿の角で作つた鏑矢

與一その比はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を以ておくび、はたそでいろへたる直垂に萌黃縅の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。滋籐の弓、脇に挾み、甲をば脫ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

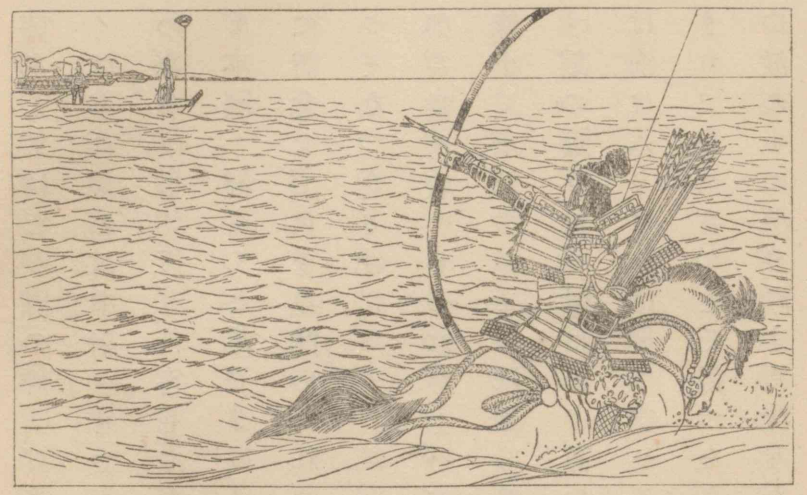
判官「いかに與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。」と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らんずる仁におほせ

つけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大いに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾う疾う鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。

興一、重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はゞ外れんをば存じ候はず、御諚にて候へば仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷りたち、黑き馬の太く逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。味方の兵ども興一が後を遙かに見送つて、「此の若者一定仕らんずると覺え候」と申しければ判官も賴しげにぞ見たまひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたりけれども、猶扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

まろほや　やどりぎの上に鳩二つ飛んでゐる形

一段　六間



那須與一扇の的を射る圖

比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟は搖り上げ、搖り据ゑ漂へば、扇もくしに定まらず、ひらめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す、陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれもはれならずといふことなし。

興一目を塞ぎて、「南無八幡大菩

日光權現　下野國河内郡日光山に鎭座する二荒山神社
宇都宮　宇都宮市に鎭座する二荒山神社
那須湯泉大明神　下野國那須郡那須村湯本の湯泉明神

薩、別してはわが國の神明、日光權現・宇都宮・那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、この矢はづさせたまふな。」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一鏑を取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一揉、二揉、揉まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ搖られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏籟をたゝいてとよめきけり。（平家物語）

二三　狐塚

主「此のあたりの者で御座る。某山田を數多持つて御座る。當年は事の外よう出來て御座る。さりながら此の頃は鹿・猿・貉が出て田を荒します。太郎冠者を呼びいだし、山田の番にやらうと存ずる。やい〳〵太郎冠者在るか。」

太「はあ。御前に居ります。」

主「汝を呼び出す事別の事でない。當年は身共の山田が事の外よう出來た。それにつき、此の頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば、追うて番をせい。」

太「畏まつて御座る。私一人で御座るか。」

主「いや後程は次郎も見舞にやらう程に、先づ往け。」

太「心得ました。」

主「さりながら此の中は狐塚の狐が出てばかすと云ふ程に、ばかされぬ樣にして番をせい。」

太「それはこはい事で御座る。もはや參ります。」

主「明日早々歸れ。」

太「はあ。」

主「えい。」

太「扨も〳〵迷惑な事いひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。參る程に是ぢや。先づ是にゐて番を致さう。」

つかはう　遣はさうの意

主「太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めてさびしうしてゐるで御座らう。次郎冠者を見舞につかはうと存ずる。やい〳〵次郎冠者あるか。」

次「是に居ります。」

主「汝は太儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次「畏まつて御座る。」

主「小筒も少し持つて行け。」

次「心得ました。是は扨迷惑なれども、參らずば成るまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。是は暗うてどこやら知れる事でない。呼ばはつて見ようほういい〳〵太郎冠者やい。どこに居るぞ。」

太「されば こそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せ

た。おのればかさるゝ事では無いぞ。先づ眉毛をぬらさう。」

次「ほうい〳〵。」

太「ほうい〳〵。こゝにゐるは。」

次「どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐるは。やあ次郎冠者か。」

次「なか〳〵。賴うだ人が言ひ付けられて伽に來たは。」

太「ようこそおりやつたれ。扨も〳〵ようばけた。そのまゝの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が追うたればこなたの山へくわら〳〵と逃げたは。」

次「それはでかした。」

太「どつこへ。やる事ではないぞ。」

次「是は何とするぞ。」

太「何とするとは。狐めばかさるゝ事ではないぞ。」

次「おれは次郎冠者ぢや。」

太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、此の柱にくゝつて置いて。狐殿よい體の。おのれ今に皮を剝いでくれうぞ。」

主「太郎冠者・次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もとなう御座る。見に參らうと存ずる。ほうい〳〵。太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほうい〳〵。」

太「是はいかな事。また狐が出をつた。あれは賴うだ人の聲ぢや。是も捕へてやらう。ほうい〳〵。」

主「ほうい〳〵。どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐます。」

がつき
餓鬼の意

主「やあ是にゐるか」淋しからうと思うて見舞に來た。次郎冠者を先へ遣したが。」

太「なか〳〵。あれにゐます。これはいかな事。是もようばけた。其のまゝ賴うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。」

主「是は何とするぞ。身共ぢや。」

太「おのれもようばけた。先づ縛つて、此の大木にくゝりつけて置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあ〳〵尾

狂言狐塚（續狂言記）

を出せ。鳴け〳〵。」

主「おのれ太郎冠者め。主を此の樣にして。罰當りめ。」

太「何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあさあ鳴け〳〵。こん〳〵といへ。」

次「これは何とする。」

太「あれや〳〵、いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて來て、皮を剝いでくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思つたなあ。唯今殺してくれうぞ。鎌を取つてくるぞ。」

主「扨も〳〵氣の毒な奴ぢや。やあそれに見ゆるは次郎冠者か。」

次「左樣で御座る。此方は賴うだ御方か。」

主「なか〳〵。汝も縛りをつたか。」

次「いかにも縛られました。」

主「何と鎌を取つて來る、殺さうと言ひをつたが、何とそちが繩はほどかれぬか。」

次「されば、どうやら繩が解けさうに御座る。解けますぞ、解けますぞ。さあ解きました。どれ〳〵、此方も解きませう。扨も扨も憎い奴で御座る。何としたもので御座らう。」

主「いや〳〵此の體ではそばへよるまい程に、もとの樣にしてゐて、これへ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。」

次「一段とよう御座らう。」

主「さあ、これへよつて元の樣にしてゐよ。」

次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で殺してくれう。さあ今打殺すぞ、打殺すぞ。」

主「それ次郎冠者。」

次「心得ました。」

主「おのれにくいやつの。次郎冠者足を持て。」

次「心得ました。」

主「さあゆりに上げ、ゆりに上げ。」

太「これは何と狐ども、するぞ。」

主「狐とはまだ、おのれめは、にくいやつの。縛り居つたが、よいか。これがよいか。これがよいか。」

太「扨は賴うだ人。次郎冠者か。免させられ。まつぴら御ゆるされ。まつぴら御ゆるされ。」

次「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。やるまいぞ。」（續狂言記）

駿河大納言
名は忠長
德川秀忠の第三子家光の同母弟
新井白石
名は君美江戸の人德川家宣に仕へて重用せられた享保十年卒年六十九
十二月二十一日
寛永八年(一六三一)

二四　駿河大納言

新井白石

十二月二十一日御鷹狩のために御出ありしに、空俄かに搔曇り寒風夥しく吹出しければ、とある庵室に立入らせ給ひて暫く御休息の程に、侍小濱七之助この庵に御座ありとも知らで馬に乘りて馳せ參るを、きと御覽じつけられて御面の色少し損ぜさせ給ふ。小濱こゝに入らせ給ふと聞きて、馬乘り放ち、やがて御前に伺候す。殿小濱召して「此の爐の中に木きりくべて火燒きて參らせよ。」と仰せければ、住持の僧薪參らす。此の程降續きたる雪氣に柴皆濕ひふすぼりて火燃えず。小濱爐の中に差俯きて火吹かんとする所を御佩刀を以て只一打に首打落し給ひ、「これ取捨てよ。」と仰せければ、清水八郎右衞門といふ侍、參りて死骸取

大相國家
二代將軍德川秀忠

忠廣
清正の嗣子

收む。「汝この火焚け。」と仰せらる。つひに近く參らぬ男、恐る恐る這ひ寄りて、また薪くべて焚く。手ふるひ息切れて、柴搔亂し、火を吹くに息出でず、猶ふすぼりて火燃えず。其の身は中々に生きたる心地もなし。御前祗候の人々、今や斬られ參らする今や斬られ參らすると、肝魂も身に添はず。されども此の度は何の御咎めもなくて立出で給ひぬ。かくさせる科なき者を、自ら斬らせ給ふこと、此の年既に六七人に及びて、明くれば正月の半ばより、大相國家の御違例殊に重らせ給ひしかど、關東に參らせ給ふことも叶はず。同二十四日大相國家終にかくれさせ給ひぬ。此の後世の中何となく靜かならず。天下亂れんこと近きにありぬとひそめきあへり。

六月朔日加藤肥後守忠廣、父子配流せらる。其の罪定かならず、

墨染に咲きし
深草の野べの櫻
し心あらば今年
ばかりは墨染に
咲け（上野岑雄）

花の袂
皆人は花の衣に
なりぬなり苔の
袂よかはきだに
せよ（僧正遍昭）

物毎に
もゝち鳥囀る春
はもの毎にあら
たまれども我ぞ
ふりゆく（古今
集讀人不知）

おとな
老臣

謀叛の人に與せしとも聞ゆ。さらば如何なる人かかゝる企のあるらんといへども、其の人も亦定かならず。かくて墨染に咲きし櫻も、梢に殘らず。春過ぎ夏闌けて、秋は紅葉の色ながら、皆人花の袂になり行く。いつしか物毎に改りぬる世となりて、八月の初め勅使下向の事あり。動きなく御世知召されて人の心定まる。十月二十三日永井信濃守尙政、御使を承つて駿河國に赴き、青山大藏少輔幸成は甲斐國に赴く。其の餘大名御家人等二十餘人、駿河・遠江・甲斐の國々に向ふ。如何なる事ぞといふ事を知らず。人皆不審しあへり。十二月十六日大納言殿の近習の侍二十餘人、諸大名に召預けらる。此の頃にぞ世には此の殿甲斐に徙され給ひぬといふ事をば知れる。同月二十一日永井・青山、御使より歸り參る。十二月には彼の家のおとな鳥居・朝倉等の輩配流せらる。明くれば十年正月の末、大納言殿、上野國高崎の城に徙され、安藤對馬守重長に預けられ給ひぬ。

此の年九月、阿部對馬守重次、將軍家の御使として行向ひ、右京亮重長に逢ひて、御使の旨を傳ふ。「駿河殿、初め罪宥められ給ひ、重長に召預けらるゝこと既に終んぬ。されども猶御心改らせ給はず、よからぬ御振舞世に漏れぬる事少なからず。きつと其の罪を定めさせ給はん事は、さすがに親しき御中なり、如何でか仰せも出さるべき。此の上は重長如何にも計らひて、彼の御心より起りて、御自害あらん樣に仕るべき者なり。」と述べたり。重長畏まり承り、暫しは、ものをも言はず。やゝありて後重次に向ひ、「重長かゝる仰を蒙ること尤も不幸の至なり。さりながら、などか仰をば背き候べき。御教書をや帶し給ふらん。さらば拜し

六議
王朝時代の刑法上の語
議親
議故
議賢
議能
議功
議貴

奉るべし。」と望む。重次聞きて「此の事、君の御心より出てて重次が口に傳へ、御身が耳に入るべき事なれば御教書を下し給ふべき事にあらず。また重次苟も執政の事に加る身として此の御使を承る、何をか疑ひ給ふべき。」といふ。重長重ねて「重長が申す所、わ殿を疑ひ参らするにもあらず。まして仰を輕んじ奉るにも候はず。そも〳〵此の殿は大相國の御寵子、將軍家の御愛弟、親しくも、貴くも、わたらせ給ひ、古にあつて、六議の中其の二つを兼ねさせ給ふ御身なり。たとひいまかく罪蒙らせ給ふとも、よのつねの人臣の例に准じ難し。されば執政の重臣仰を傳へ給ふとも、口づから述べられん事は重長たやすく領承に及ぶべからず。只願はくは、御筆を染められて下し給はるべきよしを、よきに執し給ふべし。」と云切つてければ、重次力なく引返して、此の

由を申す。やがて自ら御筆を染められし御教書を帶して、これを渡す。さてこそ重長領承をばしたりけれ。

かくて月を越えて後、十二月六日の朝に至りて、重長大納言のわたらせ給ふ所を守る侍に下知して、殿のおはします庭に、緣の間少し引きのきて、嚴しく鹿垣を結びわたす。殿自ら御出ありて、「何故にかくはするぞ。」と尋ねさせ給ひしに、重長が侍、畏まりて、「公よりの仰にや候はん、精しき事は存ぜず候」と申す。障子引立て入らせ給ひて後は、出でさせ給はず。日も已に暮れぬ。近く召使はるゝ女房達三人を、宵より皆御暇賜ひて、おのが局々に下さる。御傍にはべるもの、女の童たゞ二人あり。「酒溫めて参らせよ。」と仰せられしに依つて、御前を立つて、やがて、提子もちて参る。御盃を取上げ給ひて、めすこと二たびに至りて、「今少し溫めて参

らせよ。」とあれば、一人の童提子もちて出づ。今一人の童には、「汝は肴取りて來れ。」とありしかば、同じく御前を立つて御酒・御肴も ち來て見れば、白き御小袖の上に、黒き御小袖に御紋つきたるを打掛けて、伏させ給ひしが、御小袖悉くあけに染みて、事切れさせ給ふ。二人の女の童は大いに驚き走り出でて、かくと告げしかば、配所の御供に侍ひし人々馳せ參りて見るに、御脇刀にて、御頸の半ばつき貫かせ給ひ、前の方へ押切つて、うつぶしに伏させ給ひぬ。御年は二十八にぞならせ給ひける。また御事あるべき五三日前より、御寶ども長持に入れさせ給ひ、御手ずさみに書かせ給ひし反古やうの物と同じく、おはします所の庭にして、悉く燒棄てさせ給ひき。此の程よりかく思召立たせ給ひしにやなど、世には傳へぬ。詳かなる事をば誰か知るべき。もし此等の事誠ならんには、重長が申し〻言葉、今又一月を越えん程を待ちて、其の後御心つかせ給ふやうに計らひしは、深き心ありとぞ見えし。其の事も皆空しくなりぬれば、あはれなりし事なり。今の世誰かかゝる仰うけて、一月を越えん程を、その事となく打過ぐべき。誠に重長はゆゝしき人にこそ。（藩翰譜）

忠直
越前藩主松平忠直
德川家康の子結城秀康の長子大阪陣に功あり後狂暴
元和八年（一六二二）豐後荻原に流さる

二五　忠直卿行狀記

菊池寛
小説家
戯曲家
明治二十二年高松市生

忠直卿は今日も亦、家臣を集めて槍術の大仕合ひを催した。それは家中から槍術に優れた青年を集めて、それを二組に分けた紅白の大仕合ひであつた。そして、彼自ら紅軍に大將として出場したのである。仕合ひの

形勢は始終紅軍の方が不利であつた。出る者も出る者も、敵の爲にばた〳〵斃されて、紅軍の副將が斃れた時には、白軍には尙五人の不戰者があつた。

其の時に、紅軍の大將たる忠直卿は、自ら三間柄の大身の槍をゆうりゆうと扱いて勇氣凛然と出場した。洵に山の動くが如き勢であつた。白軍の戰士は見る〳〵裡に威壓された。最初に出た小性頭の男はかね〳〵忠直卿の猛勇を怖れて居るだけに、槍を合すか合さぬに早くも持つて居た槍を捲落されて脾腹の邊を突かれると、悶絕せんばかりにへたばつてしまつた。續く馬廻りの男と、お納戸役の男も、一溜りもなく突伏せられてしまつた。が、白軍の副將の大島左大夫といふ男は、指南番大島左膳の嫡子であつて、槍を取つては家中無雙の名譽を持つて居た。

「殿のお勢も、左大夫にはちとむづかしからう。」と云ふ囁が何處ともなく起つた。が、烈しく七八合槍を合せたかと見ると、左大夫は、したゝかに腰の邊を一突き突かれて、よろめくところをつけ入つた忠直卿の爲に、再び眞正面から胸の急所を突かれて居た。見物席に居た家中一統は、思ふ存分に喝采した。忠直卿は、やゝ息のはづまれるのを制しながら、靜かに、相手の大將の出るのを待つた。心の裡は何時もの樣に得意の絕頂であつた。

白軍の大將は小野田右近と云つた。十二の年から京に於ける槍術の名人權藤左門の門に入つて、二十の年には、師の左門にさへ勝つ程の修練を得て居た。が、忠直卿は何ものをも怖れない。「えい」と鋭く聲を掛けられると、猛然として突掛つた。たゞ技術の力と云ふよりも、そこには六十七萬石の國主の勢さへ加る如

北の庄
今の福井

く見えた。二十合にも近い恐しい戰が續いたかと思ふと、右近は右の肩先に忠直卿の烈しい一突を受けて、一間ばかり退くと、「參りました。」と平伏してしまつた。

見物の人々は、北の庄の城の崩れるばかりに喝采した。忠直卿は得意の絶頂にあつた。上席に復ると、すぐ彼は聲を揚げて「皆の者大儀ぢや、いでこれから慰勞の酒宴を開くと致さうぞ。」と叫んだのであつた。

酒宴も酣に及んだ後、忠直卿は庭へ下りて見たくなつた。小性を一人連れたまゝ庭に下り立つた。庭の面には、夜露がしつとりとおりて居る。微かな月光が城下の街を、玲瓏と澄渡る夜の大氣の裡に、墨繪の如く浮ばせて居る。

すると、ふと人聲が聞える。今まで寂然として、蟲の聲のみ淋しかつた庭に、人聲が聞え出した。聲の樣子で見ると、二人の人間が話しながら、忠直卿の休んでゐる四阿の方へ近よつて來るらしい。

二人は、四阿からは三間とは離れない泉水の汀で立止つて居るらしい。一人は左大夫で、心持聲を潜めたらしく、

「時に殿の御腕前をどう思ふ。」と訊いた。

他の一人は右近で苦笑をしたらしい氣色で、

「殿のお噂か。きこえたら、切腹物ぢやのう。」

「蔭では公方のお噂もする。どうぢや、殿のお腕前は、眞實の御力量は。」と、左大夫は可なり眞劍にきいて、じつと息を凝らして右近の評價を待つて居るやうであつた。

「さればぢやのう。いかい御上達ぢや。」と云つたまゝ、右近は言葉

を切つた。忠直卿は始めて臣下の僞らざる賞讃を聞いたやうに覺えた。が右近はもつと言葉を續けた。

「前程、勝をお讓り致すのに骨が折れなくなつたは。」

二人の若武士は其處で顏を見合せて會心の苦笑をしたらしい氣色がした。

右近の言葉を聞いた直忠卿の心の中に、そこに突如として感情の大渦卷が聲を立てゝ流れ始めたのは無論である。

忠直卿は生れて始めて、土足で以て頭上から蹂み躪られたやうな心持がした。彼の唇はぶる〳〵と顫へ、總身の血潮が煮えくり返つて、だん〴〵頭へ逆上するやうに思つた。

右近の一言に依つて、彼は今まで自分が立つて居つた人間として最高の脚臺から引きずり下されて、地上へ投出されたやうな名狀し難い衝動を受けた。臣下から僞の勝利を媚びられて居た自分が、あさましく感ぜずには居られなかつた。

無禮講の酒宴にぐだ〳〵に醉つてしまつた若武士達は、九つのお土圭が鳴るのを合圖に總立ちになつて退出すると、急にお側用人が奥殿から駈附けて來た。

「各方、靜まられい。殿の仰せらるゝには、明日も今日同樣槍術の大仕合ひを催さるゝ。時刻と番組とは凡て今日に變らぬとの仰せぢや。」と雙手を擧げて大聲に觸れ廻つた。

明日の日が來た。上座には忠直卿が昨日と同樣に座を占めたが、始終下唇を嚙むばかりでなく、眸が爛々として燃えて居た。

勝負は、昨日と殆ど同樣な情勢で進展したが昨日の勝敗が皆の心にまざ〳〵と殘つて居るので、組合はせの多くは一方に取つ

て雪辱戰であつたから、掛聲は昨日にも增して烈しかつた。

紅軍は、昨日よりもさらに旗色が惡かつた。大將の忠直卿が出られた時には、白軍は大將・副將をはじめ、六人の不戰者があつた。見物の家中の者共が、不思議に思ふ程、忠直卿は興奮して居た。たんぽの附いた大身の槍を熱に浮かされた男のやうに安に打振つた。最初の二人は腫物にでも觸るゝ樣に、恟々として立向つたが、主君の烈しい槍先に忽ちにつき竦められて平伏して仕舞ふ。次の二人も、主君の凄じい氣勢に恐ぢ怖れて、たゞ型ばかりに槍を振つただけであつた。

五人目に現れたのは大島左太夫であつた。彼は今日の忠直卿の常軌を逸したとも思はれる振舞に就いて、微かながら杞憂を懷く一人であつた。無論彼は自分の主君が、自分達の昨夜の立

話を立聞きされたとは夢にも思つて居なかつた。

「左大夫」と、忠直卿は落着きを示さうと努めたらしいが、その聲は上づつて居た。

「左大夫、槍といひ劍と云ひ、正眞の腕前は眞劍でなければ判らない。たんぽの附いた稽古槍の仕合ひは、所詮は僞の仕合ひぢや。負けても傷が附かぬとなれば、仕宜に依つては、負けても差支が無い譯となる。忠直は僞の仕合ひにはもう飽いて居る。大阪の陣での手馴れた眞槍で立向ふ程に、其の方も眞槍を持つて來い。主と思ふには及ばぬ。隙があらば遠慮致さず突け。」

忠直の眼は上づつて、言葉の末が顫へた。左大夫は色を變へた。左大夫の後ろに控へて居る小野田右近も左大夫と同じく色を變へた。

が、見物席に居る家中の者は忠直卿の心の裡を解するに苦しんだ。殿御狂氣と怖氣を顫ふものが多かつた。

忠直卿は、これまでは癇癖こそあつたが、平生至極濶達であり、稍粗暴の嫌こそあつたが、非道無殘な振舞は寸毫もなかつたので、今日の忠直卿が眞槍を手にしたのは、左大夫・右近に對する消し難い憎しみから出たとは云へ、一つには自分の正眞の腕前も知りたいと言ふ希望もあつた。眞槍で立向ふならば彼等も無下に負けはしまい、祕術を盡して立向ふに違ひない、さすれば自分の力量も判る、若しその爲に、自分が手を負ふことがあつても僞の勝利に狂喜してゐるよりも、どれ程氣持がよいか知れぬと心の裡で思つた。

「それ！眞槍の用意致せ！」と、忠直卿が命ずると、豫て用意がしてあつたのだらう、小性が二人各〻一本の大身の槍を重たさうにもたげて忠直卿主從の間に持出した。

「それ！左大夫用意せい！」と言ひながら、忠直卿は手馴れた三間柄の長槍の穗鞘を拂つた。槍鍛冶の名手備後貞包の鍛へた七寸に近い鋒先から迸る殺氣が、一座の人々の心を冷たく壓した。今迄、じつとして主君忠直の振舞を看過して居た國老の本多土佐は、主君が鋒先を拂はれるや否や突如として忠直卿の御前に出でた。

「殿！お氣が狂はせられたか。大切の御身を以て、妄に劍戟を弄ばれ、家臣の者を傷けられては、公儀に聞えても容易ならぬ儀で御座る。平にお止り下されい。」と、老眼をしばたゝきながら必死になつて申し上げた。

「爺か！止めだて無用ぢや。今日の眞槍の仕合ひは、忠直六十七萬石の家運に易へてもと、思ひたつた一儀ぢや。止め立て一切無用ぢや。」と、忠直は凜然と言ひ放つた。其處には秋霜の如く犯し難き威嚴が伴つた。かうした場合、これまでも忠直卿の意志は絶對のものであつた。土佐は口を緘んだ儘、悄然として引退いた。

左大夫はもう先刻から十分に覺悟をして居た。昨夜の立話が殿のお耳に入つた爲の御成敗かと思へば、彼には何とも文句の言ひやうはなかつた。それは家來として當然受くべき成敗であつた。それをかゝる眞槍仕合ひに假託けての成敗かと思へば彼は其處に忠直卿の好意をさへ感ずるやうに思つた。彼は主君の眞槍に貫かれて、潔く死にたいと思つた。

「左太夫如何にも眞槍を以て、お相手を致しまする。」と思ひ切つて言つた。見物席に左大夫の不遜に對する叱責の聲が洩れた。

忠直卿は苦笑した。

「それでこそ忠直の家臣ぢや。主と思ふな、隙があつたら、遠慮致さず突け！」

かう言ひながら、忠直卿は槍を扱いて二三間後へ退りながら、位を取られた。

左大夫も眞槍の鞘を拂ひ、

「御免！」と叫びながら立向つた。

一座の者は、凄じい殺氣に閉ぢられて身の毛をよだて、息を詰めて、たゞ茫然と主從の決鬪を見守るばかりであつた。

忠直卿は、自分の本當の力量を如實に知ることが出來れば、思ひ

殘すことはないとさへ思ひ込んで居た。從つて國主と言うた覺もなく、對手が臣下であると言ふ考もなく、たゞ勇氣凜然として立向はれた。

が、左大夫は最初から覺悟を極めて居た。三合ばかり槍を合はすと、彼は忠直卿の槍を左の高股に受けて、どうと地響打たせてのけ樣に倒れた。

自見物席の人々は一齊に深い溜息を洩した。左大夫の傷つい た身體は同僚の誰彼に依つて忽ち運び去られた。

が、忠直卿の心には、勝利の快感は少しもなかつた。左大夫の負が昨日と同じく意識しての負であることが、まざ〳〵と判つたので、忠直卿の心は昨夜にも增して淋しかつた。左大夫奴は、命を賭してまで、僞の勝利を主君に喫はせて居るのだと思ふと、忠

直卿の心の焦燥と淋しさと賴りなさは、更に底深くうゑ附けられた。忠直卿は自分の身を危險に置いても、臣下の身體を犧牲にしても、なほ本當のことが知りたい自分の身を恨んだ。

左大夫が倒れると、右近は少しも怯れた樣子もなく、蒼白な顏に覺悟の眸を輝かしながら、左大夫の取落した槍を提げて其處に立つた。

忠直卿は、右近奴は、昨夜あのやうに思ひ切つた言葉を吐いた男であるから、必死の手向ひをするに相違ないと消えかゝらうとする勇氣を鼓して立向つた。

が、此の男も左大夫と同じく、自分の罪を深く心の裡に感じて居た。そして潔く主君の長槍に貫かれて自分の罪を謝さうとして居た。忠直卿は五六合立合つて居る裡に、相手の右近が急所

と言ふべき胸の邊へ幾度も隙を作るのを見た。此の男も自分の命を捨てゝ迄主君を欺き了らうとして居るのだと思ふと、忠直卿は不快な淋しさに襲はれて來た。そして相手にうま〳〵と乘ぜられて、勝利を得るのが馬鹿々々しくなつて來た。

が、右近は一刻も早く、主君の槍先に貫かれたいと思つたらしく、忠直卿が突出す槍先に故意に身を當てるやうにして、右の肩口をぐさと貫かれてしまつた。

忠直卿は、見事に昨夜の鬱憤を晴したが、それは彼の心に新しい淋しさを植ゑつけたに過ぎなかつた。左大夫も右近も自分の命を賭して迄、彼等の僞を守つてしまつた事である。

忠直卿はその夜遲く、傷のまゝ自分の屋敷に運ばれた。右近と左大夫との二人が、時刻を前後して腹を割いて死んだと云ふ報

知を聽いて、黯然たる心持にならずには居られなかつた。

忠直卿はつく〴〵考へた。自分と彼等との間には、虛僞の膜がかゝつて居る。その膜を、その僞の膜を彼等は必死になつて支へて居るのだ。その僞は、浮いた僞でなく必死の懸命の僞である。忠直卿は、今日眞槍を以て、その僞の膜を必死になつて突破らうとしたのだが、その破れは彼等の血に依つて忽ち修繕されてしまつた。自分と家來との間には、依然としてその膜がかゝつて居る。その膜の向ふでは、人間が人間らしく本當に交際つて居るが、彼等が一旦自分に向ふとなると、皆其の膜を頭から被つて居る。忠直卿は自分一人、膜の此方に取殘されて居ることを思ひ出すと、焦々した淋しさが猛然として自分の身心を襲つて來るのをおぼえた。（心の王國）

師範國文 第一部用卷四 終

文部省檢定濟
大正十五年三月十七日　師範學校國語科教科書

大正十四年十月二十七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十日訂正再版印刷
大正十五年三月十三日訂正再版發行

定價
卷一・二　金四十三錢
卷三・四　金四十錢
卷五・六　金三十九錢
卷七・八・九　金三十八錢
卷十　金四十三錢

昭和三年度臨時定價
卷一・二　金七十一錢
卷三・四　金六十六錢
卷五・六　金六十五錢
卷七・八・九　金六十三錢
卷十　金七十一錢

著作所
檔有

編者　吉田彌平　東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行兼印刷者　上原才一郎　東京市神田區通神保町六番地

發行所　光風館書店　東京市神田區通神保町六番地
（電話神田三〇八七番）
（振替口座東京三二七番）

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

凸版印刷株式會社本所分工場印刷

師範學校　中學校　實業學校

各學校教科用書

師範國文　東京高等師範學校教授　吉田彌平編
新版　一部用全十冊

師範學校國文教科書
本科用全六冊　二部用全一冊

中學國文教科書　東京實業學校教授　國學院大學講師　文學博士　高野辰之編
修正十七版　全拾冊

實業國文讀本　東京高等師範學校教授　東京帝國大學部助教授　文學士　保科孝一編
初版　全十冊

實業學校國語教科書　東京高等師範學校教授　吉田彌平・小山左文二共著
修正五版　全八冊

師範學校日本文典
修正再版　全一冊

國文法綱要　東京高等師範學校教授　吉田彌平著
修正再版　全一冊

中學日本文典
修正七版　全二冊

光風館編輯所編

簡明日本文典
修正六版　全一冊

現代文新鈔　東京高等師範學校教授　吉田彌平編
修正五版　全五冊

近世文新鈔
訂正再版　全一冊

近古文新鈔
訂正再版　全二冊

增鏡鈔本
訂正再版　全一冊

光風館編輯所編

現代文鑒
訂正再版　全二冊

徒然草鈔本　東京高等師範學校教授　文學博士　中村久四郎編
訂正三版　全一冊

師範學校漢文教科書
修正八版　全四冊

中學漢文教科書　文學博士　井上哲次郎編
修正四版　全五冊

女子漢文教科書　東京高等師範學校教授　文學博士　兒島獻吉郎編
修正再版　全四冊

日本外史鈔本
修正再版　全一冊

十八史略鈔本
修正再版　全一冊

論孟鈔本
修正再版　全一冊

広島大学図書
2000301855